

タイトル	ガンディーのサティヤーグラハ運動と『バガヴァッド・ギーター』
著者	大場，四千男
引用	北海学園大学学園論集，118：1-62
発行日	2003-12-25

# ガンディーのサティヤーグラハ運動と 『バガヴァッド・ギーター』

大 場 四 千 男

## 目次

はじめに

### 第1章 ガンディーの宗教的目覚

#### 第1節 ガンディーのサティヤーグラハへの歩み

- (一)ガンディーのサティヤーグラハ (真理探究)
- (二)ガンディーの宗教体験―(1)高等学校時代
- (三)ガンディーの宗教体験―(2)イギリス留学時代

#### 第2節 南アフリカでのサティヤーグラハ

- (一)南アフリカでの宗教学習―(1)1893年の場合
- (二)南アフリカでの宗教学習―(2)1903年の場合

### 第2章 『バガヴァッド・ギーター』の救いの宗教的構造

#### 第1節 『バガヴァッド・ギーター』の位置づけ

#### 第2節 『バガヴァッド・ギーター』の宗教的救いの構造

- (一)『バガヴァッド・ギーター』の福音
- (二)『バガヴァッド・ギーター』のヨーガ形態―ヒンドゥー教の宗教意識
  - (1)ヨーガ形態―生前解脱のヨーガ
  - (2)ヨーガ形態―臨終ヨーガ

#### 第3節 『バガヴァッド・ギーター』の四種姓の社会と4つの道=ヨーガ

- (一)四種姓の社会=この世の業理論
  - (1)『マハーバーラタ』と四種姓の社会
  - (2)『バガヴァッド・ギーター』と四種姓の社会
- (二)解脱への4つの道
  - (1)カルマの道
  - (2)サンニャーサの道
  - (3)ジニャーナの道
  - (4)バクティの道

結び

## はじめに

東南アジアの中でインドの占める地位は特異な側面と普遍的側面との二面性を有する。すなわち、インドの特異な側面はヒンドゥー教の有機体的宗教、とりわけ人格神の多様性に示され、主にマックス・ヴェーバーの宗教社会学研究に代表される宗教的側面である。このヒンドゥー教は宗教的生活規範に基づく禁欲的四住期の生活を守ることを法として義務づけ、四種姓<sup>ヴァルナ</sup>の社会の構成原理から成る有機体的—身分別の階級<sup>ジャーティ</sup>序列をカースト制度としてインドの基層に根づかせる<sup>(1)</sup>。このインドの宗教社会、とりわけヴァルナとジャーティ(カースト)との有機体的社会構成を巡る社会改革は宗教改革として論争され、M.K. ガンディー(本来はガンディーの発音となるが、ここでは通称となっているガンディーを採用する)と B.R. アンベードカルの間で激しく論争される。ヒンドゥー教とカースト制度の問題はインドの自治、さらに独立への問題と関連することとなり、ガンディーの生涯をかける根本問題、つまり、サティヤグラハとなる。

だが、インドの普遍的側面は東南アジアの経済・政治現象として共通に見られる欧米先進国による植民地支配とそれに対抗する民族自決運動である。東南アジアでのイギリス植民地支配とその植民地資本主義の発達近年アジア経済史及び経営史研究の対象となるが、その先行研究者は川勝平太<sup>(2)</sup>、杉原薫<sup>(3)</sup>、杉山伸也<sup>(4)</sup>、そして、脇村孝平等<sup>(5)</sup>である。

しかし、インドの宗教社会学とアジア経済史・経営史研究との両者を総合化する先行研究は少なく、わずかに長崎暢子、辛島昇、今田秀作、アマルティア・セン、そして小谷汪之等に見出されるにすぎない<sup>(6)</sup>。したがって、本章ではインドの宗教社会学とアジア経済史・研究史の両者を総合するためにモーHANDAS・K・ガンディーのサティヤグラハ運動を取りあげ、イギリスのインド植民地資本主義を根底から切り崩し、自立的資本主義へ再編するインドの近代化過程を分析課題とする。

こうしたインドの宗教社会学とアジア経済史・経営史研究を総合化する本章での試論はインド資本主義論として初めて取りあげられ、分析されることになると考えられる。そのためここではガンディーのサティヤグラハ運動の起源をガンディーの歩みとの関連で前半において分析する。

とりわけ、ガンディーがヒンドゥー教のビッシュヌ派の熱心な両親の下に生まれ育ち、二大英雄叙事詩『マハーバーラタ』と『ラーマーヤナ』を子守歌に聞きながら成長することから、彼の正統派ヒンディー教徒としての歩みについて本章の前半で掘り下げて明らかにする。

が、ガンディーは『マハーバーラタ』6巻目に収録されている『バガヴァッド・ギーター』を「無私なる行為の福音書」と見做し、サティヤグラハ(真理探究)の根本原理に集大成することに成功する。南アフリカでの弁護士業に専心するガンディーは南アフリカ政府の人種差別政策、さらに白人優越主義の下で苦しみ、迫害されるインド人社会を救い、特に<sup>リ</sup>年期労働者の雇傭、契約条件の改善、人頭税の廃止、選挙権剥奪阻止運動、結婚式のキリスト教への統一に対する廃止

運動等をサティヤーグラハの立場からインド人社会を指導し、成果をあげるののである。

それゆえ、ガンディーがサティヤーグラハ運動の聖典として『バガヴァッド・ギーター』に依拠するゆえ、本章の後半では『バガヴァッド・ギーター』での救いの宗教的構造を分析課題として取りあげる。この『バガヴァッド・ギーター』の宗教的解釈はアンベードカルとガンディーの論争の中心となるからである。つまり、カースト制度はヒンドゥー教を源泉とするのか(アンベードカル)、或いは四種姓を源泉とするのか(ガンディー)で相違するからである。

ところが、本章では『バガヴァッド・ギーター』がヴェータの第4部としてヒンドゥー教の聖典と見做されるゆえ、ヒンドゥー教の有機体的宗教それ自体が分析される。こうしたヒンドゥー教の有機体的宗教としての特徴は仏教の無我論、キリスト教、イスラーム教、そして、ジャイナ教等の非対称的絶対宗教と相違する宗教となり、東南アジアでの一つの正統派宗教として発展する。それゆえ、東南アジアでの植民地支配と資本主義の発達はインドに代表されるように、宗教問題の解決を避けることのできない点で共通の普遍的側面としている。

さらに、『バガヴァッド・ギーター』がヒンドゥー教の聖典としてインドの精神的基層を形成することは四種姓の社会と4住期の生活の法を<sup>ダルマ</sup>遵守することを義務づけ、このことから福音としての解脱も4つの道=ヨーガとして体系化される。通説は解脱への3つの道として位置づけられてきたが、本書では上村勝彦の研究を踏まえ、新しくサンニャーサの道を加え、4つの道として体系化しようとする試論となる<sup>7)</sup>。

## 第1章 ガンディーの宗教的目覚

近代インド資本主義がイギリスの支配に基づく植民地編成で第一次大戦前に確立されることになるが、第一次世界大戦はそのインド植民地編成に政治的に、また、経済的に大きな影響を与え、インドの独立運動と経済的自立運動を国民的運動(ナショナリズム)に発展する契機となるのである。イギリス支配からの政治的な独立運動と経済的自立運動を国民運動に高めるのに決定的な役割を果たすのがマハトマ・ガンディー(モーハンダス・カラムチャンド・ガンディー Mohandas Karamchand Gandhi)である<sup>8)</sup>。

彼はインドを植民地的に編成し、インドから大量の富をイギリス本国へ流出することでインドを貧困の底に陥し込むイギリスのインド支配をヒンドゥー教の真理(サッティヤ)に反するものとしてその崩壊に全力を注ぎ、非暴力(アッサンヒ)でイギリス支配に終止符を打ち込むのである。かくて、ヒンドゥー教はジャイナ教、パールシー教、仏教、イスラーム教が商手工業を宗教的経済基盤にするのに対し、インド人口の七割を占める農村を宗教的経済基盤にするのであり、まさにインド全土に普及するインド教=国民宗教の地位を確立するのである。ガンディーはこうした農村に根を張るヒンドゥー教を総動員して真正面からイギリスのインド支配の解体に向けて民族的結集を図り、禁欲的ヒンドゥー教の宗教改革を促進し、ガンディー的救いの目標としてインド独立を掲げるのである。本章ではこうしたガンディーのサティヤーグラハの中に孕む近代的

宗教改革の歴史的意義を明らかにし、さらに、インド独立と経済的自立とを同時に達成するガンディー的解決の枠組 (=資本主義の自立的発展) を分析することを狙いとする。

が、インドの宗教改革であるガンディー的解決法は、ヒンドゥー教の聖典である『バガヴァッド・ギーター』をモデル=理念型にして組立てられ、サティヤグラムとして集体成されるのである<sup>(9)</sup>。

## 第1節 ガンディーのサティヤグラムへの歩み

ガンディーの生涯はある意味で『バガヴァッド・ギーター』を子守歌のように聞き続け、『実践知』を体得する『ヨーギン』(ヨーガの常修者)として解脱(無私的行為者)するのであり、まさに、悪魔的イギリスのインド支配から独立するためにヒンドゥー教徒によるインド資本主義の自立を導く歩みとなる。

### (一)ガンディーのサティヤグラム(真理探究)

ガンディーは『自叙伝』Satyana prayogo athva At makatha (An Autobiography: The Story of My Experiments with Truth)の中でヒンドゥー教の「真理」を最高神として実践的に認識(至高神の自在性)することを人生の実験であると位置づける。つまり、「私がしなければならないこと、30年来、私のはやる気持ちで繰り返し続けたこと、それは自己省察であり、神との対面であり、解脱です。私の活動はすべて、まさにこの視点で行われています」と、彼は生涯を振り返り、求道者としてヒンドゥー教の「真理」(神の実在論)の探求を行うのである。さらに、ガンディーはヒンドゥー教の「原理に基づいて行われた活動の歴史こそ伝えなければならないので、私はその試みに「<sup>サッティヤ</sup>真理への実験」という題目を付けたのです」と述べ、「真理の実験」(至高神の自在性と一体化すること)を<sup>ヨーギン</sup>実践者として達成しようとするのである<sup>(10)</sup>。ちなみに、ガンディーの宗教改革のキー・ワードとなる「真理」について、ガンディーは「この真理は、たんに私たちの観念上の真理ではなく、無制約、永遠の真理。つまり<sup>パラメーシュワル</sup>最高神そのものです」と述べ、ヒンドゥー教の最高神=ヴィシュヌークリシュナ神信仰を真理と把握する。したがって、ガンディーの真理はヴィシュヌークリシュナ神への信仰を意味するが、具体的には無私的行為者としての清浄への悟りである。ガンディーはインドの独立を真理と捉え、他方、イギリスのインド支配を不浄(悪魔)と位置づける。ここに、ガンディーは真理(=インド独立)と不浄(=イギリスの支配の現象界・化現)との二元論を展開し、ヴィシュヌークリシュナ神への一体化に救いを求める不二一元論(カドヴァイタ)を展開するのである。ここでガンディーのこうしたサティヤグラム(真理探究)が狙う不二一元論を達成することはヒンドゥー教をインド人の神性の自覚(純質)で再聖化することとなり、宗教改革(ヒンドゥー教の再聖化)の福音として現われるのである。ヴィシュヌークリシュナ神に対する不二一元論は真理に対する人間的存在と生命の再聖化を達成するが、不浄(イギリスのインド支配の仮現)に対する真理(インドの独立=ヴィシュヌ神の顕現化)

の宗教的かつ世俗的救い=福音を伴うのである<sup>(11)</sup>。

ガンディーは眼前に展開する不浄(=イギリスのインド支配の仮現)を浄め、解脱として真理(=インドの独立神の顕在化)に救いを求めてインド人の神性を目覚めさせ、その手段として非暴力<sup>アヒンサー</sup>に訴え、まさに『バガヴァッド・ギーター』の捨離者(無私の行為者)になることをインド国民に求めるのである。ヴィシュヌ・クリシュナ神が最高神として顕現する不二一元論はサティヤグラハを通して実践されることとなる。

かくて、ガンディーは「遠くの方から純粹真理<sup>ヴィシュドサッティヤ</sup>一神一をちらっと見ています。真理こそがある、これ以外、ほかの何ものもこの世界にはない、このような私の信念は日増しに強くなっています」と述べるのである。ここにサティヤグラハはヒンドゥー教の不二一元論を非暴力(アヒンサー)として実践される<sup>(12)</sup>。

が、ガンディーのサティヤグラハ(真理探究)はヒンドゥー教の不二一元論を意図し、宗教改革として現れることになるが、真理を実践する救いの道は一見すれば『バガヴァッド・ギーター』の救いの道と逆のものと思われがちとなる。なぜならば、『バガヴァッド・ギーター』での救いの道はクリシュナが戦士<sup>クシャトリア</sup>アルジュナに決定された行為の義務を遂行することを求め、不浄の敵軍ドリタラーシトラとその息子達を討ち滅ぼすことを最高神への真理=行為の義務<sup>ダルマ</sup>として求めているからである。しかし、例えば、アルジュナが戦士<sup>クシャトリア</sup>として美徳<sup>カルマ</sup>の義務<sup>ダルマ</sup>を果さなく、クリシュナの道具にならなくても、クリシュナは最高神としてカーマ(時間)の支配者として敵軍ドリタラーシトラとその息子達の生命を時間的に帰滅させるのである。しかし、クリシュナが救いの道として真理=行為の義務(戦争)の方法として位置づけているのはアルジュナの業<sup>カルマ</sup>の義務<sup>ダルマ</sup>の遂行であり、かつ、行為の果報を放擲する捨離者<sup>テイヤーギン</sup>(=実践者=放擲者<sup>ヨーギン</sup>=解脱者<sup>サンヒャーシン</sup>)としてのアルジュナである。ここに『バガヴァッド・ギーター』の救いは行為の義務の遂行とその果報の捨離=放擲との不二一元論的解決にあるが、ガンディーの場合も、その救いは真理の探求で無私の行為者とその福音という不二一元論に求めるのである。こうしたガンディーの救いの構造は『バガヴァッド・ギーター』の救いの枠組である不二一元論をモデル=理念型にして構成されるのである<sup>(13)</sup>。

## (二)ガンディーの宗教体験(1)高等学校時代

ガンディーの生涯はヒンドゥー教の聖典である二大叙事詩の『マハーバーラタ』と『ラーマヤナ』を「神の歌」の子守歌として聞きながら生まれ育ち、1948年1月30日暗殺される時、「ヘー・ラーマ、ラーマ(おお、神よ)」とつぶやく79歳で亡くなる。ラーマを絶えずつぶやくガンディーは『ラーマヤナ』を引用して真理と非暴力を「神の歌」として唱えるのである。

彼はグジャラート州のボールバンダル藩王国<sup>ディーワーン</sup>の役職(民事事件の調停、地租徴収人)を務める父のカムラチャンド・ガンディーとその妻プトゥリーバーイーとの四男として1869年10月2日に生まれた。「ガンディー家は以前、香辛料を商う家」であるため、ガンディー家のカースト(種姓)は「交易、商業、金融業に従事するカースト」(ヴァイシャ)であり、J・ネールのバラモン

と対照的なカースト出身となる<sup>(14)</sup>。

両親ともヒンドゥー教徒であるが、とりわけ、母親は熱心なヒンドゥー教のヴィシュヌ派に属し、常にヴィシュヌ派寺院に通って礼拝するが、雨<sup>チャートウルマース</sup>期(5月から9月)での断食<sup>チャンドラーヤン</sup>(1日1食)を実践する。父はヒンドゥー教の聖典である『バガヴァッド・ギーター』を晩年の精神的よりどころとするのである。つまり、父は「晩年には、家族とも親しい学識のあるバラモン(マーヴジー・ダヴェー)の助言で、『ギーター』の郎唱を始めるようになりました。毎日、朝の礼拝のとき、2, 3のシュローカ(頌=8音節4行詩節)を大きな声で郎唱していました」と、『バガヴァッド・ギーター』の郎唱に努めた。

こうした『バガヴァッド・ギーター』の郎唱を子守歌として聞きながら育つガンディーは両親のヒンドゥー教徒カースト(ジャーティ)を受け継ぎ、「神の声」に聞き耳を立てる神性の素質(純質)を自然に能力として身につけるのである。彼は7歳でラージコートの小学校(5年制)に入学し、12歳になると、カーティヤーワール高等学校(中学・高校一貫制の6年制)に入った。ヒンドゥー教の宗教的、かつ社会的習慣(カーティヤーワール地方の慣習)である幼児結婚を余儀なくされ、ガンディーは勉学中にも拘らず、両親の決めた同じカーストであるボールバンドルの商人ゴークルダース・マーカンジーの娘カストゥルバーイと13歳で結婚した<sup>(15)</sup>。これはカースト制度(ジャーティ)の内婚制である。

が、父の病気(痔瘻)のため貧しくなったガンディーは5年次、6年次に奨学金を受け、特にヒンドゥー教の教えを守る品行を重視した。だが、高等学校ではヒンドゥー教の禁止している肉食を食べる改革運動が一般化し、ヒンドゥー教徒であるにも拘わらず、「隠れて肉食し、飲酒をしている」先生、生徒が増え、肉食でイギリス人より強く、勇敢になることが一般化し、このことは改革と呼ばれ、もてはやされるのであった。友人の勧めで、改革として肉食をすすめられるガンディーはその試食を何回か試ろみるが、しかし、「両親を欺き、嘘をつくのは肉を食べないこと以上に悪い」と、ヒンドゥー教の教えに戻り、その真理を守ることに意を決するのである。ガンディーは肉食を拒否し、ヒンドゥー教の教えに従う理由について次のように述べる<sup>(16)</sup>。

「この決定(肉食拒否)―この開始―の意味をすべての読者は理解できないでしょう。ガンディー家はヴァイシュナブ派、両親はとても熱烈な信徒と見なされていました。ハヴェーリー(ヒンドゥー教寺院)にしょっちゅう通っています。いくつかの寺院はガンディー家が寄進したものとされています。それに、グジャラートではジャイナ教の勢力が圧倒的、ジャイナ教の影響はいたるところで、ありとあらゆる営みにうかがえるのです。ですから肉食に対する抵抗、禁忌は、グジャラートにおいて、また、ジャイナ教徒とヴァイシュナブ派(ヒンドゥー教)信徒の間であって、インドあるいは世界のどこにも見られないほど強いのです。これが私のサムスカール。

私はたいへんな親孝行。私が肉食したことを知ったら、両親は心臓発作を起こして死んで

しまうと思っていました。知っていたのか知らずにいたのか、とにかく私は真理に仕える者でした。肉食をすることは、両親を欺く<sup>あざむ</sup>ことになる、そのときそのことを知らなかったとはいえません」

既に述べたように、「ガンディー家はヴァイシュナブ派」（ヒンドゥー教の二大宗派シヴァー派に対するヴィシュヌ派のこと）を受け継ぐ「両親はとても熱烈な信徒」である。さらに、ガンディーの生まれ育ったグジャラート州はジャイナ教とヒンドゥー教ヴィシュヌ派が「インドあるいは世界のどこにも見られないほど強い」地域である<sup>(17)</sup>。こうした宗教環境の中で育ったガンディーにとってはヒンドゥー教の宗教的教え、かつ社会的な生活慣習の義務を「神の声」として精神（＝神聖感覚）の魂として受け入れ、個我（アートマン）と神（ブラフマン）との一体化による不二元論を信仰心とするのである。それゆえ、ヒンドゥー教の教えに背むいて肉食をすることはガンディーにとって熱烈な信徒である「両親を欺く<sup>あざむ</sup>ことになり、真理に背むくことにもなる。

が、この高等学校での肉食に象徴される改革は体格的にイギリス人に対して劣ることから生じたのであるが、その底流に流れるインド独立への国民的願望を反映し、ガンディーのスワラジ（自治）運動をサティヤーグラハの中心課題にする前ぶれの事件となるのである。ガンディーは肉食熱となった背景についてナルマダーシャンカラの次の詩句を掲げ、「学校で歌われていました」と指摘する<sup>(18)</sup>。

「イギリス人たちは支配し、インド人は抑えられる  
インド人は抑えられる、両方の身体を見てごらん  
やつらは身体六尺、一人で五百人相手だ」

さらに、高等学校時代に肉食事件と前後してガンディーを苦しめたのはピーリー煙草を吸うため、使用人の財布から金を盗んだことに対する犯罪意識の昂まりである。この盗みに対する罪改めの浄化のため、彼は父に「手紙を書いて罪を認め、赦しを求め」るのである。ガンディーの贖罪を乞う手紙を受け取った「父は手紙を読みました。目からは真珠の粒がこぼれ落ちました」とショックを受けるのである。この父の涙を見て、ガンディーは「真珠の粒という、この愛の矢が私を突き刺したのです。私は浄化されました」と述べ、父の涙でガンディーの罪改めの贖罪<sup>アヒンサー</sup>という非暴力を体験するのである。彼は『ラーマヤナ』のラーマ（ヴィシュヌ神の化身）になぞらえて次のように非暴力<sup>アヒンサー</sup>の持つ最高の贖罪について告げる<sup>(19)</sup>。

「ラーマの矢を受けた者だけが知る。

私にとっては、これが非暴力の体験学習の第一課でした。そのときは、父の愛以外、何も分かりませんでした。今日になってみると、これを純粹の非暴力という名で認識できます。



このような非暴力が普遍的な形を取るとき、これに感動するのを誰が避けられるでしょうか？ このような普遍的非暴力の力を測るのは不可能です。

このように穏やかな許容は父の性質に反するものでした。父は怒り狂い、激しいことばを口にし、たぶん、自分の頭を割るのではないかと思っていました。しかし、父はこれほどまでに無限の平静さを保ちました。思うに、罪を率直に受け入れたことが原因でした。しかるべき人の面前で、自発的に邪心なく罪を認め、二度とけっしてそのような罪を犯さないと誓う者は、最高の贖罪をすることになるのです。分かるのですが、告白で父は私の将来に心配することがなくなり、大いなる愛はさらに深いものとなったのです」

罪を告白して父への贖罪の矢で心を射たれたガンディーは不浄を清浄へ立直らせるのに暴力でなく、涙と愛の非暴力で覚醒することを初めて宗教的体験学習をするのである。その父が病気(痔瘻)で寝こみ、死期を迎えるや、勉学の合い間を見てガンディーは父の看病をするのであるが、この時に「宗教をちらっと見る」のである。この宗教への覚醒は(一)ボールバンドルでのラーマ讃歌である『ラーマ・ラクシャー』『トゥルスイーラーマーヤン』の郎唱を父と一緒に聞いたことと、(二)ラージコートでヒンドゥー教の聖典である『バーガヴァット』=『バーガヴァタ・プラーナ』(ヴィシュヌークリシュナ神讃歌)を「熱心に読」んだこと、さらに(三)父の病気見舞に訪れるキリスト教を除くあらゆる宗派、とりわけ、ジャイナ教、イスラーム教、そして、パルスィー教の友人達が「宗教について語」るのを父の後ろで聞いたこと等によって宗教への関心を深めるのである<sup>(20)</sup>。これらの宗教の体験学習で、ガンディーは「一つのことを心に根を下ろしました—この世界の礎は<sup>いしづえ</sup>道德である。道德は真理に包含されている。真理を探究しなければならない」と悟り、真理を宗教道德に求めようとする。ガンディーが真理として探究する宗教道德は「仇に恩で報いる」という非暴力の発想である。ガンディーはシャーマルバット(18世紀グジャラーティー語詩人)の次の六行詩(実践道德)の中に宗教の真理をちらっと見るのである<sup>(21)</sup>。

「水を飲ませてくれたら、すばらしい食事をさしあげよう。  
やって来て頭を下げて挨拶したら、五体投地の礼をしよう。  
小銭を出してくれたら、金貨に値することをしてさしあげよう。  
恩を報じてくれたら、心とことばと行為で10倍にして報いよう。  
仇に恩で報いる人の生こそ、この世において真に意味あるもの。」

が、16歳の時に、父が亡くなるが、臨終に立ち会えないガンディーは親不孝の恥と罰(生まれた男の子が息を引きとって亡くなる)を受けるのであった。

### (三)ガンディーの宗教体験—(2)イギリス留学時代

家族の後見人であるマヴジー・ダヴェー（バラモン）は、父の役職<sup>ディーワーン</sup>を継ぐべく法廷弁護士の資格をイギリスで取ることを進め、ガンディーのイギリス留学を決定的にするのである。が、ガンディーが医者になることを希望していたが、兄は「私たちヴァイシュナヴ信徒はメスを使うようなことをしてはならない。お父さんはおまえを弁護士にしたかったんだよ」と述べ、ジョージ（マヴジー・ダヴェーを呼ぶ名称）の弁護士論を支持した<sup>(22)</sup>。

また、ガンディーのイギリス留学にもう一つのカーストの問題が生じ、ガンディー一族を苦しめるのである。遠戚に当たるカーストの長はカースト会議を開催し、ヒンドゥー教が禁じている海を渡ってイギリスで留学することをカーストの規則違反として反対する。つまり、「カーストの意見では、イギリスへ行こうと考えたのは正しくない。我々の宗教で、海を渡るのは禁じられている。さらに、聞くところによると、イギリスで宗教は守れない。イギリス人たちと食事を共にしなければならないからだ」と、カーストの長はヒンドゥー教の禁じている牛肉を食することになることから反対する。その結果、カーストの長はガンディーをカーストから除名し、追放する判決を下した。「この少年は今日からカーストより放逐された者とされる。この者を援助したり、または見送りに行く者は、尋問され、ールピョー四アーナーの罰金に処す」と、ガンディーのカーストからの放逐が決定されるのである。この問題は帰国後に於いても尾を引き、カースト会議を二分することとなる。カーストから追放されてイギリスに渡ったガンディーのイギリス留学（インナー・テンプルに入学）で直面する難問題は(一)肉食を拒絶し<sup>ヴェジタリアル</sup>菜食主義に専念することと、(二)語学（英語、フランス語とラテン語）の修得を大学入学検定試験に合格するための必修科目とされていたこと、さらに、(三)性格的な羞恥心から黙りこくってしまうこと等である。が、ガンディーはこれら難問題を解決するのに宗教的感覚を鋭くし、ますます真理探究を模索することで解決していくのである<sup>(23)</sup>。

さらに、イギリス留学がガンディーにとって「私を神は救ってくれた」宗教的体験学習の場になったことはガンディーの宗教的資質（純質）を開花するのに導くのである。留学中での宗教学習は(一)『バガヴァッド・ギーター』、『アジアの光』を読み、座右の書にしたこと、(二)『新約聖書』を読み、自己犠牲を宗教の本質として認識を深めたこと、(三)女性問題から救ってくれた友人（＝神ラーマ）の矢で、「恥じ入り」「目覚め」「神が救ってくれた」と有神論を確立したことである。これらの宗教体験についてももう少し詳しく見ていく。

(一)『バガヴァッド・ギーター』と『アジアの光』は神智主義者の兄弟と読み始めるが、特にガンディーは『バガヴァッド・ギーター』第2章の次の詩節から欲望（＝不浄）の恐しさからの救いを宗教課題（＝真理）とするのである<sup>(24)</sup>。

「人が感官の対象を思う時、それらに対する執着が彼に生ずる。

執着から欲望が生じ、欲望から怒りが生ずる。

怒りから迷妄が生じ、迷妄から記憶の混乱が生ずる。

記憶の混乱から知性の喪失が生じ、知性の喪失から人は破滅する。」

この『バガヴァッド・ギーター』の神の声は「私の心に深い影響を与えました。私の耳に鳴り響いています」と、ガンディーの心を捕えるのである。そして、ガンディーは「失意のとき、この書はどれほど私を救ってくれた」ことかと述べる。まさに、ガンディーはこの『バガヴァッド・ギーター』の救いの構造（最高神ヴィシュヌークリシュナ神を真理（真浄）として捨離者になるという不二一元論）をインド独立（＝真理）への救いの道（非暴力）と見做す際に、インド解放の精神知をこの『ギーター』（『バガヴァッド・ギーター』を『ギーター』と以下略する）から学ぶのである。

(二)『新約聖書』を読み、キリスト教の自己犠牲を知る迄、ガンディーはキリスト教を嫌っていたが、キリスト教を再認識するのである。キリスト教の自己犠牲が前述したシャーマルバットの六行詩である「仇を恩で報い」る実践道徳を再現するものであるが、ガンディーはこの真理を宗教心のコアと位置づける。すなわち、「『新約聖書』になると、別の影響を受けるようになりました。イエスの「山上の垂訓」は私にたいへん良い影響を与えました。私はしっかり心に留めました<sup>(25)</sup>。頭で『ギーター』と比較しました。「下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい」「あなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい」これを読んで私は限りない喜びを覚えました」と、ガンディーは告白する<sup>(26)</sup>。

かくて、ガンディーはヒンドゥー教の聖典『ギーター』、仏教書の『アジアの光』、そして、キリスト教の『新約聖書』に共通する同一精神（宗教道徳）を自己犠牲（無私的行為）に求め、真理を認識する。が、ガンディーの宗教学習を理論知から実践知へ移し、「私を神が救ってくれた」と有神論を体験するのは女性問題を契機にしてである。

### (三)女性問題と有神論

1897年ポーツマスの菜食主義者大会へ出席するため、ガンディーは友人と二人で民宿する。彼らはその夜、婦人を交えてトランプ遊びに興じているうち、ガンディーはその婦人と「ことばから行為に移ろうとしていました」が、友人に「あれ、君が世も末のふるまいをするとは！ 君はしてはならない。出て行きなさい。ここから」と、友人から神ラーマの矢を受けるのである。この不浄の場を逃れ、ガンディーは「神が私を救ってくれた」と始めて有神論を体験学習し、自己の中に神性の感覚（純質）を発見するのである。神の援助の手がガンディーに差し伸べられるが、その神の声はヒンドゥー教の讃歌、崇拜、祈禱として心の琴線に鳴り響くのである。すなわち、「性欲という汚濁を浄化するために、心からの崇拜こそが万能薬であると私は信じて疑いません」と、ガンディーは不浄から清浄への救いを神の声（真理）に求め、贖罪するのである。

かくて、ガンディーはイギリス留学中に有神論を体験学習し、現象界を覆っている幻力<sup>マヤー</sup>を払って真理を知る神性に覚醒し、不二一元論を信仰心とするのである。彼は22歳で留学の目的である

法廷弁護士の試験に合格し、3年振りにインドへ帰国した<sup>(27)</sup>。

## 第2節 南アフリカでのサティヤーグラハ

イギリス留学を終え、法廷弁護士の資格を取ってインドに帰国したガンディーは兄の援助で弁護士業を積み、ポールバンダル藩王国の役職を世襲するのにガンディー家の期待を負っていたが、しかし、ソウラーシュトラに定住している農民（メール種族）の重税問題に関係し始めるのである。が、イギリス官吏による地租への重税に関する裁判でガンディーは「ここではイギリス人の意向が法律なのです」ということを体験し、「激怒」してインドで正義の行われていないことを痛感する。この小さな裁判でガンディーは大衆の苦しみの中に真理を見出し、救いとして大衆奉仕へ取組むサティヤーグラハへの実験を試み、サティヤーグラハへの傾斜を強めるのである。

兄が南アフリカでの弁護士の仕事（小切手振込み裁判訴訟の弁護士として）を引受けるよう依頼するのを受け、ガンディーはスンニー派イスラーム教徒でメマンで商会（総合商社、主に南アフリカに住む出稼ぎインド人労働者（クリー）向けに食料品、雑貨を販売する）を営むダーダー・アブドゥッラーとシェート・アブドゥルで会い、事務弁護士に就くことを承諾した。かくて、何回かのインド往復を含めてガンディーは1893年の23歳から1915年の46歳迄南アフリカでクリーインド人労働者へのサティヤーグラハに取り組み、『バガヴァッド・ギーター』の救いを応用し、ガンディー流の救いの解決法（サティヤーグラハ）を確立していくのである。まさに、ガンディーのサティヤーグラハは南アフリカで前哨線となるが、しかし、この初期においてイギリスへのロイヤリティ（忠誠心）を背景にして行われるという限界と弱点を内包するものとなっている<sup>(28)</sup>。

### （一）南アフリカでの宗教学習―(1)1893年の場合

高等学校、さらにイギリス留学での宗教体験が阿修羅の不浄から神性の清浄への移行と贖罪を、父及び友人のラーマの矢を打たれることで体験することになるが、この少年期から青年期にかけての過渡期ではガンディーは神の救いを受ける受動的サティヤーグラハを行うのであり、自己犠牲と宗教学習とを中心にするものであった。

が、南アフリカでの宗教体験と学習は受動的サティヤーグラハから能動的サティヤーグラハへ転換し、神の声を聞く直接的宗教訓練と理論知との結合を『バガヴァッド・ギーター』に求めるのである。

南アフリカのダーバンに着いたガンディーはナタールでの人種差別と宗教問題に巻き込まれる。ダーダー・アブドゥッラーとタイヤブ・シュートは親戚同志であるが、ダーバン（ダーダー）とトランスヴァールのプレトリア（タイヤブ）の商会間で小切手4万ポンドの偽小切手振出しを巡って訴訟を起こし、争っている。ガンディーはプレトリアで商会の帳簿を調査するのに1カ年を要したが、小切手振出しの経過を検証した結果、両者間に和解調停で事件を解決することを両者に要請する。この和解を両者が受け入れ、結果としてダーダー・アブドゥッラーが勝ち、他方

タイヤブ・シュートは敗れ、37,000ポンドと訴訟費用の支払いをガンディーの図らいによって長期年賦払いで済ませることができた。この調査期間中にトランスヴァールでの人種差別についてガンディーは1894年8月インド人会議を設立し、始めて大衆奉仕としてサティヤグラハに取り組むこととなる。ガンディーは南アフリカのアジア人、インド人に対する人種差別を阿修羅=不浄と捕え、インド人の救いをこの業病からの救いに見做す。彼は「この業病は人種偏見である。もし私にこの深い病を除く力があるなら、その力を行使しなければならない」と、サティヤグラハへの実験を決意する<sup>(29)</sup>。

前述したインド人会議の設立総会でガンディーはサティヤグラハ運動の原則を次の4点として提案する。すなわち、(一)商売と宗教が一致すること、(二)貪欲な商人とその商売で他の多くのインド人も同様に見做されることから商人の責任が重いこと、(三)イギリス人と較べインド人が不潔であるから、生活態度を含めて清潔にすること、(四)宗教、出身地の相違なしにインド人として統一行動を取ること、(四)協会を通して請願書を政府当局に提出し、或いは、交渉を行って人種差別と追放の改善と廃棄を行うこと等であるが、これらの提案は全て了承された。

ガンディーが南アフリカで体験する人種差別とインド人の追放、或いは、指定地域(ゲッター)への強制移住は、オレンジ自由国の1888年の法律で、また、トランスヴァールで1885年の法律で、その後改正(1886年)で決定されたが、さらに南インドからのクリー(年期契約労働者)は入国税3ポンドの人頭税支払いを義務づけられるのである<sup>(30)</sup>。

他方、インド人会議が活動の拠点となってガンディーの指導の下に人種差別問題に取り組み、その実践活動を拡大するに伴ない、その実践を支える理論知への宗教活動も漸次拡大し始める。これまでキリスト教に嫌悪を抱いていたガンディーは1893年に宗教的葛藤の中でキリスト教への理解を深め、自己浄化としてのキリスト教を位置づけようと努めた。キリスト教を熱心に勧誘したのはプレトリアの商会弁護士であるA・W・ベイカーで、プロテスタントの説教師をも行っていた。彼はガンディーに「毎旦一時、祈禱式に出席する」ことを求め、さらに、ウェリントン大会に出席することを要請した。ガンディーは、また、多くのキリスト教の書籍をも読んだが、キリスト教に対して「内なる響き」を感じないのである。その上、彼は、ヒンドゥー教のヴィシュヌ・クリシュナ神の至高性に較べてキリストを「至高の人として受け入れることは不可能でした」と述べるのである。が、ガンディーはロシアの文豪であるトルストイの『御国は汝らが胸の中に有り』に深い感銘を受け、生涯においてトルストイと文通を行うのである。つまり、この「本は私を圧倒してしまいました。深く影響されました。この本の自由な思考方法、深い倫理感、真理」に感銘するガンディーは宗教への疑問をエドワード・メイトラント、さらに、ラーエチャンドバハイーにぶつけ、送られてきた『バンチーカラナ』、『マニラトナマーラー』、『ヨーガヴァースィシタ』、『六派哲学綱要』を読み、「宗教についての探求心を目覚めていく」のである<sup>(31)</sup>。

## (二)南アフリカでの宗教学習—(2)1903 年の場合

南アフリカでの<sup>ギルミューティヤ</sup>契約労働者の雇傭問題は人種差別の典型例であり、主に南インドから出稼ぎとして5カ年間の契約で南アフリカに移民する不可触民を中心とするインド人は白人の雇傭主の財産として扱われ、乱暴されても我慢しなければならず、もし雇傭主の所を去るなら、「刑法上の罪人とされる」のであり、奴隷扱いの待遇を受けるのであった。マドラス出身のインド人であるバース・スングラムがガンディーに助けを求めた。この相談の中で、契約労働者の雇傭関係を知ったガンディーは知人のイギリス人に雇傭主になってもらい、雇傭名義変更手続きを行って問題を解決した。さらに、アフリカではサトウキビ・プランテーションに現地人の黒人を使用せず、主にインド人、中国人等のアジア人を雇傭していたため、インド人街、チャイナ・タウンが発展するのであった。こうしたことから、ガンディーはナタールのサトウキビ栽培プランテーションで働らく大量のインド人<sup>契約労働者</sup>の存在を知り、インド人街の発展に目を見張るのであった。ナタール政府はインド政府と交渉し、インド人の<sup>契約労働者</sup>の移民について(一)5カ年間の契約労働、(二)満了後ナタール居住の認可、(三)土地所有権を与へ、耕作地で取れる農産物の販売を認め、(四)商業を営むことをも許可することで、ナタールの黒人の出来ないサトウキビ栽培にインド人を大量に雇傭することで発展を図るのである。

が、5カ年後の契約雇傭の終了で、多くのインド人が土地と家屋所有者となり、さらに、商店を経営して商業に乗り出すと、白人の競争相手となり、白人の商店と商業を脅やかすほどに発達するのであった。このため、白人はインド人の選挙権を剝奪し、また、契約労働者に人頭税として年間25ポンド(375ルピー)を課税する1894年法案を立案し、インド政府と交渉した。だが、インド政府のエルギン総督は南アフリカ使節団のヘンリー・ビンズ・メイソンに対して人頭税25ポンドの代わりに1人3ポンドの課税と徴収を許可した。ナタール政府はこの後(3~4年で)でインド人家族の妻、夫、男子16歳以上、女子13歳以上からの人頭税徴収の強化を図り、4人家族から年12ポンドの課税を行うのであった。

この人頭税の課税に対してガンディーはインド人会議を通してインド人を総動員してサティヤーグラハ運動を行ない、結果として廃止まで20年間にわたって取り組むのである<sup>(32)</sup>。

南アフリカでのサティヤーグラハはこのインド人への人頭税反対運動を実験の最初として火蓋を切った。このため、ガンディーは南アフリカでのインド人の苦しみを救うため、以前より強く宗教にその救いを求める。ガンディーがヒンドゥー教に救いの真理を求めるもう一つの理由は南アフリカで生まれるインド人の若者達がキリスト教徒に改宗し、「牧師たちのいいなり。牧師たちは白人、政府に従属」する現実を目にしたからである。「若者たちはキリスト教徒であるので、インド人ではなくなったのか？そして外国人になってしまったのか？」と、ガンディーはキリスト教に改宗するインドの若者達をヒンドゥー教へ再聖化するためにもヒンドゥー教の真理を探究することを不可避と考えるのである。が、キリスト教への疑問はガンディーにとっては同時にヒンドゥー教への疑問を重ね合わせ的に生じさせることとなるのである。彼はヒンドゥー教の至高

性、さらに、カースト制度の欠陥、とりわけ、不可触民制の存在について次のように告げる<sup>(33)</sup>。

「キリスト教を受け入れられなかったように、ヒンドゥー教の完璧さについても、つまり、至高性についても、その当時、決められないままでいました。ヒンドゥー教のさまざまな欠陥が私の目の前に浮かんでいました。不可触制がもしヒンドゥー教の一部であるのなら、それは腐り切った、後代に結びつけられた部分のように思われました。多くの宗派、多くのカーストの存在は理解できませんでした。『ヴェーダ』だけが神によって作られたとする意味は何なのでしょう？ もし『ヴェーダ』が神によって作られたものであるなら、『聖書』や『コーラン』はなぜそうでないのでしょうか？」

また、ガンディーはキリスト教に次いで、イスラーム教徒、とりわけ、アブドゥッラー・シュートの熱心な勧誘を受け、イスラーム教について宗教学習するのである。このため、彼は『聖典コーラン』、ワシントン・アーヴィングの『ムハマド伝』、カーライルの『ムハマド礼賛』を読み、自己内観を深めるのである。さらに、彼はトルストイの『要約福音書』、『何をなすべきか』で深く感銘し、世界愛に目覚めるのである。

が、南アフリカでのボーア戦争は新しい人種差別を作り、ガンディーを含むインド人を苦しめることとなるのである。この新しい人種差別の苦しみを救うことでガンディーは『バガヴァッド・ギーター』の真理と非暴力をサティヤグラハの中核に位置づけ、不二一元論を救いの構造として確信するのである。つまり、『バガヴァッド・ギーター』のヴィシュヌークリシュナ神<sup>ブラフマン</sup>にガンディー自身を一体化させ、不二一元論を確認するため断食<sup>ブラフチカルマ</sup>を試みる。この断食は神と一体化し、神の声を聞くヨーガの実践知となる。かくて、ガンディーは断食<sup>ブラフチカルマ</sup>＝瞑想<sup>ヨーギン</sup>を通して内なる神と同一化することで大衆奉仕の実践＝行為の遂行を成し遂げることができる。ボーア戦争の結果、トランスヴァール政府がアジア局を新設し、アジア人、とりわけ、中国人、インド人がボーア戦争のため州外に避難していたが、終戦でトランスヴァールへ帰国する際、インド人の復帰を厳格に審査するため帰国許可証を有することを条件としてインド人社会を苦しみの中に陥し入れるのである。ガンディーもトランスヴァールに戻るためダーバン警察署長（アレクサンダー）の好意で移民局から帰国許可書を発行してもらったが、そうでなければ、アジア局の官吏に100ポンドほど贈賄として払うことを余儀なくされるのである。だが、白人の場合はすぐに帰国許可書が発行されたのである。こうした新しい人種差別のため、インド人社会は「何千何万ルピーが略奪され」ることとなった<sup>(34)</sup>。

トランスヴァールに戻るや、ガンディーはこのアジア局の専制と特権（収賄罪）に対して闘うため、弁護士登録を行い、ヨハネスバークに弁護士事務所を神智論者のリッチの好意で開設した。彼はアジア局官吏の帰国許可証を担当する2人の官吏による中国人、インド人からの収賄に関する証拠資料を集め、警察長官の協力を得て起訴に踏み切った。しかし、2人の白人は白人陪

審員によって無罪にされたが、アジア局を解雇され、失業した。が、免職となった2人は今度ヨハネスバーク市役所に就職運動を行い、この就職への援助をガンディーに求めてきたのである。ガンディーは2人に対して「個人的には私の心に何のわだかまりもなかった」ので、助力をして2人を職に就かせた<sup>(35)</sup>。

この強者との闘いとその改心による贖罪はガンディーにとって初めてのサティヤーグラハの実験となり、「非暴力の特徴的部分」となるのである。この偶然の贖罪結果はガンディーにサティヤーグラハを確信させ、その後のインド人社会の苦しみを救うガンディー的解決法として確立することとなる。ガンディーはこの2人に対する贖罪としてのサティヤーグラハについて次のように指摘するのである<sup>(36)</sup>。

「人と人の行為、この二つは別のものです。よい行為は尊重され、悪い行為は非難されなければなりません。善行であろうが悪行であろうが、行為者に対しては、いつも尊重と慈悲の気持ちがなければなりません。このことを理解するのは容易ですが、実行はほとんどされないものです。まさにこの理由でこの世に毒が蔓延しているのです。

真理探究の根元にこのような非暴力があります。それを手にしない限り、真理には出会えないと、絶えず感じています。体制に立ち向かうのはすばらしいことですが、体制の支配者を攻撃することは自分を攻撃するのと同じです。というのは、私たちすべてが同じ刷毛<sup>はけ</sup>で作られたものだからです。同じ創造主ブラフマーの子供だからです。支配者にも無限の力があります。支配者を軽視し非難するのは、その無限の力を軽視することになります。そうすることで、支配者と同じように世の中に損失を及ぼすのです」

ガンディーはインド人社会を苦しめる行為者、或いは、支配者の心を改め、不浄から清浄へ贖罪させることを真理<sup>サティヤ</sup>の根元にある非暴力<sup>アヒンサー</sup>と位置づけ、サティヤーグラハのコアにするのである。こうしたガンディーの救いの構想は大衆奉仕の実践の中で開花するのであるが、その構想力をガンディーは『バガヴァッド・ギーター』に求めるのである<sup>(37)</sup>。

が、ガンディーはインド人社会に大衆奉仕をすることで宗教体験と学習の輪を拡大する。つまり、「1893年にキリスト教徒の友人たちと身近に接するようになったとき、私はただ学ぶ立場にいました」と述べるが、しかし、ガンディーは「1903年には状況が少し変わってしまっていました」と宗教への探究の変化を告白する。この1903年の状況の変化は神智論者と始めた『バガヴァッド・ギーター』に対する取組み方の中で生じるのであった。すなわち「私は『ギーター』に対しては愛着と畏敬の念を持っていました。いまこそ『ギーター』の深みに降りる必要があると私は思いました」と告白する。ガンディーの『ギーター』への学習姿勢の変化は前述した白人官吏への闘いとその贖罪への心理変化を宗教的に解明したいという現われであると云える。このため、ガンディーは『ギーター』18章のうち13章まで暗記し、血肉化しようとする徹底振りを次のよう



に行った<sup>(38)</sup>。

「翻訳書の助けで、原典のサンスクリット語を理解しようと努めました。そしていつも一つか二つ、シュローカを暗記することにしようと思決心しました。

私は朝の歯磨きと沐浴の時間を暗記のために使いました。歯磨きに15分、沐浴に20分かかっていました。歯磨きはイギリス式に立ったままでしていました。正面の壁に『ギター』のシュローカを書いたものを貼りつけ、必要に応じて見ていました。そして暗記のため口にして繰り返していました。暗記したシュローカは沐浴の時間までに完全になるのです。この間に、前に暗記したシュローカをもう一度、反復していました。このようにして13章まで暗記したことを覚えています。後になると私の仕事は増えてしまい、サッティヤグラハが誕生すると、この<sup>おきなご</sup>幼児の養育について考えることで、時間が過ぎ去ってしまうようになりました」

『ギター』の第13章まで暗記を執拗にするガンディーの宗教的熱意は『ギター』を真理探究の聖典と位置づけ、大衆奉仕の実践的指針として対立する行為者＝支配者の贖罪への改心（＝宗教的覚醒）を達成することを狙いにする不二一元論の立場に立つのである。このため、ガンディーは『ギター』の最高神と同化＝一体化することを不可避と考え、この至高に達することで相手の行為者＝支配者の改心と贖罪を得ることに重点を置くのである。だが、『ギター』を『無私なる行為の福音』と宗教的に解釈するガンディーは不二一元論の根本原理の体得に際し、直面する理論知としての<sup>サマバーヴァ</sup>平等、<sup>アパリグラハ</sup>非所有、ブラフマチャルヤの瞑想＝静寂を解決し、真理と非暴力を救いの道と確信するのである。

ガンディーは『ギター』の救いの構造を二重化し、一方で行為者＝支配者の改心とその贖罪に導く最高神と同化＝一体化すること、他方、行為の美德ダルマ（非暴力）を成就することを究極の境地とする。とりわけ、ガンディーが『ギター』から宗教的理論知として直面する難問題である非所有、<sup>いつく</sup>平等及び愛すること、慈しむこと、対等のパートナーとなること等を非暴力の原理として体系化する際、最も困難を感じたことは非所有の把握を巡ってである。このため、イギリス法理論の中に解決の手掛りを見つけようと試みるが、信託理論での所有と経営の分離を応用することがガンディーの解決法となる。つまり、神から富＝金を多く委託されることが信託受託人の道德心であるなら、信託受託人は所有から分離されて富＝金の管理を委託され、1バーイーでも所有の中から無駄に支出できないと考える。ガンディーは地主制を例にし、小作人からの小作料を富として受け取るが、この小作料＝富を神からの預かりで、所有に基づく富の蓄積と見做さない。この非所有は地主と小作の区別を無くし、相対的に平等なパートナーとすることから生じ、まさに所有の果報を放擲することから成り立つのである。『デーヴィー・マーハートミヤ』の中で世界を支える神（アンバー＝チャンディカー）はこの非所有を「執着を剥ぎ落とす知」と見

做すのである。このように非所有は貧富を平等の同一にする、或いは無差別にする。大衆奉仕の実践者は富を有する行為者＝支配者を信託受託人へ改心することで両者間に無差別な、かつ、非所有の平等者の関係に立ち、所有と経営の分離を図ることを副音として確立する<sup>(39)</sup>。この点についてアンベードカルは幼稚な解決としてガンディーを批判する。

ガンディーが『ギーター』で救いの二重構造（＝不二一元論）を、つまり、(一)最高神への同一化、(二)行為の副音（非差別、平等、非所有）の成就、とを大衆奉仕の救いの構造（真理と非暴力）の編成原理にすることに一応基本的に成功するが、しかし、理論知と実践知との統合は非所有として現われる『無私なる行為の福音』として把握される。ガンディーは対立する支配者の欲望を覆っている大いなる幻惑<sup>マヤー</sup>を取り払って清浄し、その支配者の心の暗質を打ち抜いている釘を除去して改心させ、或いは贖罪の心を目覚めさせることになると次のように告げる<sup>(40)</sup>。

「行動に関するさまざまな困難や問題を、私は『ギーター』ジーによって解決していました。非所有、平等などの単語が私を捉えていました。平等をどのように発展させたらよいか、どのように守ったらいいのか？ 侮辱する官吏たち、収賄する官吏たち、意味なく反対する昨日までの仲間達などなど、最大限に恩恵を施してくれた方々との間に差違がないとは、どういうことなのか？ 非所有はどのように守られるのであろうか？……イギリス法が助けてくれました。スネルの法理論の論議を思い出したのです。『ギーター』ジーの学習の結果、とりわけ「信託受託者」の語の意味を特に理解しました。法律学への尊敬の念が増しました。法律学にも私は宗教を見たのです。信託受託人のところに何千万何億ルピーがあっても、1バーイーたりとも信託受託人のものではない。解脱を願うものは、信託受託人のようにしなければならない、このことを私は『ギーター』ジーから理解したのです。非所有者になるために、平等者となるために、改心が必要であることが灯火のようにはっきり見えたのです」

ガンディーが『ギーター』に基づいてサティヤグラハを救いの構造とすることは不二一元論を福音の根本原理として体系化することを意味するのである。つまり、ガンディーは断食で清浄化し、無私<sup>アハティヤ</sup>の行為者として信託受託人の立場に立って対立する支配者の心にラーマの矢を放って改心させ、贖罪させることで相手と同じ非所有者＝平等者に立つことができると考えるのである。『ギーター』の宗教的理論化とその実践知としてのサティヤグラハ運動は、南アフリカでのインド人社会に対する自治運動（スワラジ）として、さらにインド民族の独立への精神的支えへの副音として実践されてゆくのである<sup>(41)</sup>。

## 第2章 『バガヴァッド・ギーター』の救いの宗教的構造

南アフリカから第一次大戦後に帰国するや、ガンディーがサティヤグラハ運動をインド全土に拡大し、イギリスの植民地支配をインドの貧困の原因と見做してインド民衆の苦しみを救うと

同時に、インド独立に向けて政治的かつ経済的に自立化を図ることに全力を注ぐのである。こうしたインド社会の構造改革は農村の根底からこれらの改革を達成することが不可避となる。このため、ガンディーは『バガヴァッド・ギーター』をインド社会の改革を行なう理論知＝福音書と見做し、不二一元論の眼でインドの民族自決運動を導こうとする。したがって、ガンディーは『バガヴァッド・ギーター』をインドの救いの聖典と位置づけ、インド独立への道筋を真理と非暴力のルールに乗せようとする。インドの社会改革が宗教改革の性格を強く帯びるのはガンディーとアンベードカルの間での不可触民解放を巡る論争に現われる。この不可触民解放はインドの民族自決運動を左右し、ひいてはインド資本主義の自立化の方向に大きな影響を与えることとなる。ガンディーとアンベードカルの論争は『ギーター』を救いの福音書と見做すかどうかと関係し、インド民族を総結集する聖典と位置づけられるかに関するものである。ガンディーが『ギーター』をサティヤグラハ運動の聖典として見做し、『ギーター』をインド民族自決運動のイデオロギー(国民思想＝ナショナリズム)として位置づけたことは前に述べたところである。こうしたガンディーの『ギーター』への思い込みと思想的位置づけは『ギーター』の救いの構造に収斂されることになる。それゆえ、次に、『バガヴァッド・ギーター』の救いの構造について検証する。この検証は『バガヴァッド・ギーター』の宗教社会学的位置づけを不可避とするのである。

### 第1節 『バガヴァッド・ギーター』の位置づけ

ヒンドゥー教の中での『バガヴァッド・ギーター』の位置づけは次の図1に示される<sup>(42)</sup>。

図1に示されるように、『バガヴァッド・ギーター』はヒンドゥー教の発展を時期区分すると、第一期ヴェーダの世界、第二期ウパニシャットの世界、第三期六派哲学<sup>ろっば</sup>そして、第四期『マハーバーラタ』、『ラーマーヤナ』の二大叙事詩の時代の四段階で、紀元4世紀前後に編纂される『マハーバーラタ』第6巻目に捜入されている。したがって、『バガヴァッド・ギーター』はヒンドゥー教の最も発展した、かつ、成熟した完成度の高い聖典として位置づけることができる。

ヒンドゥー教が『バガヴァッド・ギーター』で完成されることになるのなら、(一)のヴェーダ、(二)のウパニシャット哲学をどう継承し、第三期の六派哲学の発展の上に如何に体系化されることになるのかという問題を明らかにすることはガンディーのサティヤグラハの役割を見る上でも重要な問題であると思われる。

が、『バガヴァッド・ギーター』は第一期のヴェーダの世界、とりわけ、バラモン教の祭礼至上主義と自然神の崇拜、さらに輪廻の世界観を次のように批判する<sup>(43)</sup>。

「愚者たちはヴェーダ聖典の言葉に喜び、他に何もないと説き、華々しい言葉を語る。

欲望を性とし、生天に専念する彼らは、行為の結果として再生をもたらし、享楽と権力をめざす多種多様な儀式についての、華々しい言葉を語る。

その言葉に心を奪われ、享楽と権力に執着する人々にとって、決定を性とする知性が三昧<sup>サマーディ</sup>

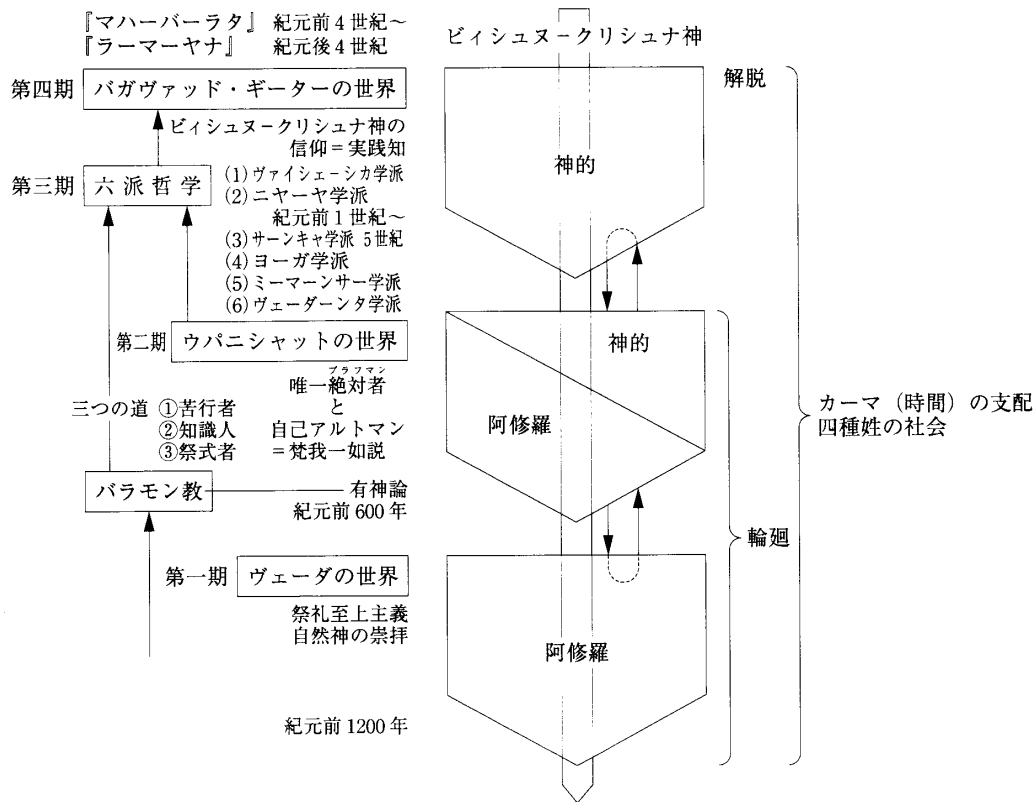


図1 『バガヴァッド・ギーター』の位置づけ

において形成されることはない。

ヴェーダは三要素よりなるもの（現象界）を対象とする。三要素よりなるものを離れよ。アルジェナよ、相対を離れ、常に純質に立脚し、獲得と保全を離れ、自己を制御せよ。いたる所で水が溢れている時、井戸は無用である。同様に、真実を知るバラモンにとって、すべてのヴェーダは無用である」

『バガヴァッド・ギーター』で聖バガヴァッドはヴェーダ聖典で説かれる祭式至上主義（賛歌、呪法、祭式による解脱）を欲望、享楽、権力、そして、生天に執着することから、ヴェーダの果報への執着を批判して「すべてのヴェーダは無用である」と否定する。逆に、欲望、輪廻から救われるためにはヴェーダでの祭式と行為の果報を捨離し、相対から離れてヨーガ（瞑想）に立脚してビシシュヌークリシュナ神に専念することを求める。

が、ヴェーダ聖典に基づいてバラモン、クシャトリヤ、ヴァイシャが行うインドラやルドラの自然・宇宙神に対する祭式（プルシャ）は祭式の果報に強い願望を求め、天界に生まれることに執着し、或いは、現世的な享楽や繁栄、権力をめざす祭式と儀式及び華々しい言葉で飾られ、司祭官バラモンによって行なわれるのである。その上、『ギーター』のクリシュナ（聖バガヴァッド）はヴェーダ祭式で生天しても、輪廻の世界から抜け出すことができないと見做す。

次に、『バガヴァッド・ギーター』は第二期のウパニシャット哲学が救いへの道として梵我一如

を体系化し、かつヴェーダを批判的に発展することで知とヨーガ（瞑想）への道を切り開くことに進歩性を見るのである。このウパニシャッド哲学は、形而上学（哲学）から人格神（ヴィシュヌ・クリシュナ神）への信仰をヒンドゥー教の大衆信仰として高めるのに過渡的な中継ぎの役割を果たすことになるのである<sup>(44)</sup>。

ウパニシャッド哲学を体系化し梵我一如説を唱くのは『ブリハッド・アーラニヤカ』の聖典であり、ヴィデーハ王ジャイカ（以下王と略す）と聖仙ヤージュニヴァルキヤ（以下ヤ仙と略す）との解脱を巡る宗教論争の中で明らかにされる。この中で、ヤ仙は王の問う梵について、言語、氣息、眼（＝視覚）、耳（＝聴覚）、意、心の元素であると答える。梵は最高神で、かつ宇宙創造主であり、一切主であるが、有から生じる。続けて、ヤ仙は「大王よ、心は実に一切有類の依拠なり、大王よ、心は一切有類の拠処なり。何となれば大王よ、心においてこそ一切有類は安立すれ。大王よ最高梵は実に心なり。かく知りてこの（梵を）信奉する者を、心は捨棄せず、一切有類は彼に向って集い来り、彼は神となりて諸神の許へ赴く」と述べ、梵を最高神と見做し、輪廻から逃れる道であるとする。ヤ仙はこの梵が人我（＝本<sup>ブラフマン</sup>体<sup>プルシャ</sup>）と一如になり、人間の眼の下にある心蔵の空処に住み、微細なものとして見る、聞く、知ることの主体になっている人間の感覚であると次のように答える<sup>(45)</sup>。

「二 右眼の中に在るこの人我（＝本<sup>プルシャ</sup>体）は実にインダ（Indha 点火者）と称せらる。インダたる者を、人は実にただ神秘的にインドラ（Indra 神名）と称するのみ。何となれば神は神秘を好み、顕現を嫌うに似たればなり。

三 次に左目の中に在るこの人我の形想は、これ彼（＝インダ）の妻なるヴィラジュ（Virāj 「遍照者」）なり。心蔵内に在るこの空処は、すなわち両者の唱和処（＝会合の場所）なり。また心蔵内に在るこの血塊は、すなわち両者の食餌なり。また心蔵内に在るこの網状のものはすなわち両者の被服なり。また心蔵より上方に向って昇るこの一脈管は、すなわち両者の徘徊する通路なり。あたかも一髪の千分とせられたるごとく[細き]、ローターと称するそれらの脈管は、彼（＝プルシャ・個人我）のために心蔵内に安立す。これらの[脈管]を通じて実に流動物（＝栄養）は[彼に]流れ来る。ゆえに彼はこの肉身我（肉体的活力・肉体）よりも、さらに精選せられたる食餌を有するに似たり。

四……一切の機能は一切方なり。この我（＝プルシャ）は、ただ「非也・非也」と説き得べきのみ。彼（＝プルシャ）は不可捉なり、何となれば彼は捕捉せられざればなり。彼は不可壊なり、何となれば彼は破壊せられざればなり。彼は無染着なり、何となれば彼は染着せられざればなり。彼は束縛せられずして動揺せず、毀損せられず。ジャイカ王よ、御身は実に無畏（＝安穩）に到達せられたり」と、ヤージュニヴァルキヤは云えり」

かくて、梵は個我（＝魂<sup>ブラフマン</sup>）と一体化して、人間の心蔵の空処に住み、人間の眼、耳、心であ

る主体となるが、微細となって脈管を通して人間の器管を機能させる。が、この個<sup>アートマン</sup>我は東西南北、上下方の一切方に向う。また、個<sup>アートマン</sup>我は「非也・非也」と説き、不可促、不可壊、そして無染着、不死となる。ヤ仙は「この肉身なく不死なる生氣(=アートマン)こそ実に梵なれ、実に光明になれ」と述べ、欲望を離れて個我が梵に帰入する梵我一如説を体系づけ、ウパニシャッド哲学の形而上学を完成させる<sup>(46)</sup>。

さらに、『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』の中でウグダーラカ・アールニは梵我一如<sup>う</sup>を有(梵=宇宙・神)と命我(アートマン)との一体(=一如)として把握するが、この梵我一如の境地を例えて「睡眠の状態」を想定する。すなわち、「この世において人眠ると云わるる時、愛児よ(息子のシュヴェータケートウ・アールネーヤのこと)彼はその時<sup>う</sup>有と合一せるなり。自己(Sva)に到達せる(apita)なり。ゆえに彼につき「眠る(Svapiti)」と称するなり。何となれば彼は自己に到達したればなり」と述べ、有と個我の合一が睡眠状態の中で実現されることを告げる。

ウパニシャッドの形而上学は梵我一如説、或いは有・命我合一説で宇宙と個我(魂)との一体化を体系化し、さらにその究極の状態である「睡眠の状態」となって解脱状態となる。ウパニシャッド哲学の梵我一如説は紀元前1世紀の頃にバーダラーヤナの編纂する『ブラフマ・スートラ』の不二一元論へ受け継がれる。なお、この不二一元論は第三期の六派哲学の一つであるヴェーダーンタ学派によって体系化される。ヴェーダーンタ学派は正統バラモン哲学の六派の中心を占めている。六派哲学とは(1)ヴァイシェシカ学派、(2)ニヤーヤ学派、(3)サーンキヤ学派、(4)ヨーガ学派(サーンキヤ・ヨーガ)、(5)ミーマーンサー学派、そして、(6)ヴェーダーンタ学派である。『ブラフマ・スートラ』に注釈を加えるシャンカラ(750-780年頃)は最高原理ブラフマン(世界原因)が自己の主体(アートマン)をブラフマンとして認識する最高の知識を知り、他方、この世の現象界を大いなる<sup>マヤー</sup>幻力によって覆われていると見做し、不二一元論を唱くのである。

こうしたヴェーダーンタ学派の不二一元論を完成させるのが第四期の『ギーター』である。『ギーター』がヒンドゥー教の第四のヴェーダ聖典となったのはヴェーダーンタ哲学の不二一元論の欠陥である世界原因を非人格的な中性原理(ブラフマン)から人格神であるヴィシュヌークリシュナ神へ求めるコヘルニクスの展開をするのである。また、シャンカラはバラモン、クシャトリア、ヴァイシャの上位三ヴァルナを再生族(ドヴィジャ)とし、シュードラ以下を一生族(エーカジャ)と区別し、ブラフマン(梵)との一体化をヒンドゥー教徒の人生目的とするのである。が、『バガヴァッド・ギーター』はブラフマン<sup>ブラフマン</sup>を人格神(ヴィシュヌークリシュナ神)への信仰に発展させ、また、「睡眠の状態」をヨーガ=瞑想と静観の世界として体系化する。『バガヴァッド・ギーター』はヴェーダーンタ哲学をヒンドゥー教の人格神への信仰宗教として次のように位置づける<sup>(47)</sup>。

「オーム(聖音)、タット(「それ」)、サット(実在、善)は、ブラフマンを指示する三種の語であると伝えられる。これにより、かつてバラモンとヴェーダと祭礼とが創造された。

それ故、ブラフマン(ヴェーダ)を説く人々の場合、常に「オーム」と唱えてから、教令に

述べられた祭祀と布施と苦行の諸行が始まる。

解脱を望む人々は、「タット」と[念じて]、果報を意図しないで、祭祀と苦行の諸行為や、種々の布施の行為を行う。

「サット」という語は、実在という意味と、善という意味で用いられる。また、「サット」という語は、讃えられる行為について用いられる。

そして、祭祀と苦行と布施における[窮極の]境地が「サット」と言われる。また、そのための行為も「サット」と呼ばれる。

信仰なしに供物を焼べ、布施をし、苦行し、行為をしても、それは「サットでない」と言われる。アルジュナよ、それは現世においても来世においても[成果が]ない

この長文の含意するところは『ギター』が第三期の六派哲学の一つであるミーマーンサー学派の唱えるヴェーダ聖典での祭礼とその教令を批判し、ブラフマンを人格神の中に見出す信仰知を重視している点である。特に「サット」は真理であり、「有」を意味する。この有は実在神と見做され、真理である。この実在神を心で知るとは信仰知の根源となり、歓喜を呼ぶ。それゆえ、有・知・歓喜の三位一体はブラフマン(梵)であり、心(アートマン)に入り、梵我一如を信仰知の現われと位置づけ、不二一元論へ導く。したがって、『バガヴァッド・ギター』は「信仰なしに供物を焼べ、布施をし、苦行し、行為をしても、それは「サット」でない」と、第三期の六派哲学の正統派であるヴェーダーンタ学派の「信仰なし」について批判し、「現世においても来世においても[成果が]ない」形而上学の理論知にすぎないと否定する<sup>(48)</sup>。新しい信仰の中心に据えるヨーガ、或いはヨーギンが解脱の最高知であると説く『バガヴァッド・ギター』は輪廻に陥るヴェーダーンタ哲学の知識人について次のように批判する<sup>(49)</sup>。

「ヨーガから脱落した者は、善行者の世界に達し、無限の歲月そこに住んだ後、清浄で栄光ある人々の家に再生する。

あるいはまた、叡智あるヨーギンたちの一族に生まれる。実に、このような出生は、世間において非常に得られ難いものだ。

そこで彼は、前生に得た知性との結合を得る。それから更に、成就をめざして努力する。というのは、彼はまさに前生の常修により、否応なく支配されるから、ヨーガを知ろうと望むだけでも、彼は音声のブラフマン[の観法]を凌駕する。

一方、孜々として努力するヨーギンは、その罪が浄められ、多生を経て成<sup>サンシッデイ</sup>就に達し、かくて最高の帰趨(解脱)に達する。

ヨーギンは苦行者よりも優れ、知識人よりも優れていると考えられる。またヨーギンは祭祀を行う者よりも優れている。それ故、アルジュナよ、ヨーギンであれ。

すべてのヨーギンのうちでも、私に心を向け、信仰を抱き、私を信愛する者は、「最高に専

心した者」であると、私は考える」

かくて、ヴェーダーンタ哲学を唱く聖仙、苦行者、そして知識人は不二一元論を無神論として体系化するが、生得宗教のカルマン(因果応報)とサンサーラ(霊魂輪廻)に対する解脱への道を確認することができない。が、『ギーター』では生得宗教の業理論を解決する救いを人格神への信仰知(有神論)に求め、不二一元論を理論知にすることで解脱し、涅槃(ニルヴァーナ)に達する<sup>(50)</sup>ことになる救いの道を体系化するのである。

## 第2節 『バガヴァッド・ギーター』の宗教的救いの構造

『バガヴァッド・ギーター』は第三期のヴェーダーンタ哲学の不二一元論をヒンドゥー教の大衆信仰への有神論として体系化し、解脱への道を3つの道に集大成することでヒンドゥー教の聖典として至高の存在となり、今日インド民衆の宗教聖典として発達をみるのである。

が、『バガヴァッド・ギーター』が仏教、ジャイナ教の批判にさらされるバラモン教とウパニシャッド哲学に対して内部改革を行うヴェーダーンタ哲学の不二一元論を人格神信仰知へ発展させ、3つの道への解脱に集大成することは、同時に仏教の無我論に対して有我論を新しく宗教理論として対置させ、従来のジャイナ教、仏教の批判を乗り越えようとする<sup>(51)</sup>。

### (一)『バガヴァッド・ギーター』の福音

それゆえ、第四期の『バガヴァッド・ギーター』がヒンドゥー教の聖典として理論知と実践知の総合化(不二一元論の世界)の中心に据えたのは(一)有我論と(二)解脱への3つの道((1)バクティの道、(2)カルマの道、(3)ジニャーナの道)である。しかし、『バガヴァッド・ギーター』の救いの構造は(一)有我論を人格神(ヴィシュヌークリシュナ神)への信仰と位置づけ、その有神論を不二一元論に求め、さらに、(二)解脱の3つの道にサンニャーサ(放擲)の道をつけ加える4つの道をヒンドゥー教の救いの全体像と見做すことができる。『ギーター』に描かれるヒンドゥー教の救いの全体像は、次の図2に要約することができる<sup>(52)</sup>。

この図2はこの世=現世の世俗社会を特徴づける(一)3種(欲望、怒り、貪欲)の地獄の門、つまり暗黒の門の中で阿修羅に生きる人々を救い、(二)生死流転の海である輪廻に喘いでいる人々を救い、(三)四種姓ヴァルナの階層社会ジャーティでの美德グルマの衰退、不徳アダルマの栄えから苦しむ人々を救うこと、つまり、解脱することをヒンドゥー教の聖典に求めていることの全体像を現わすものである。したがって、『バガヴァッド・ギーター』は(一)この世、あの世、両者の中間の3つの社会を想定し、これら仮現の社会を創造するブラフマン(梵)を超越する人格神=ヴィシュヌークリシュナ神を実在するものと捕え、(二)その人格神=最高神=至上神と一体化し同化する人間の身体アートマンの心蔵に宿す個我=自己の主体の存在を想定し、そして、(三)ブラフマンとアートマンの梵我一如を実現する4つの道(=ヨーガ)((1)行為のヨーガ、(2)知性のヨーガ、(3)信愛のヨーガ、(4)放擲のヨーガ)の働らきを解脱



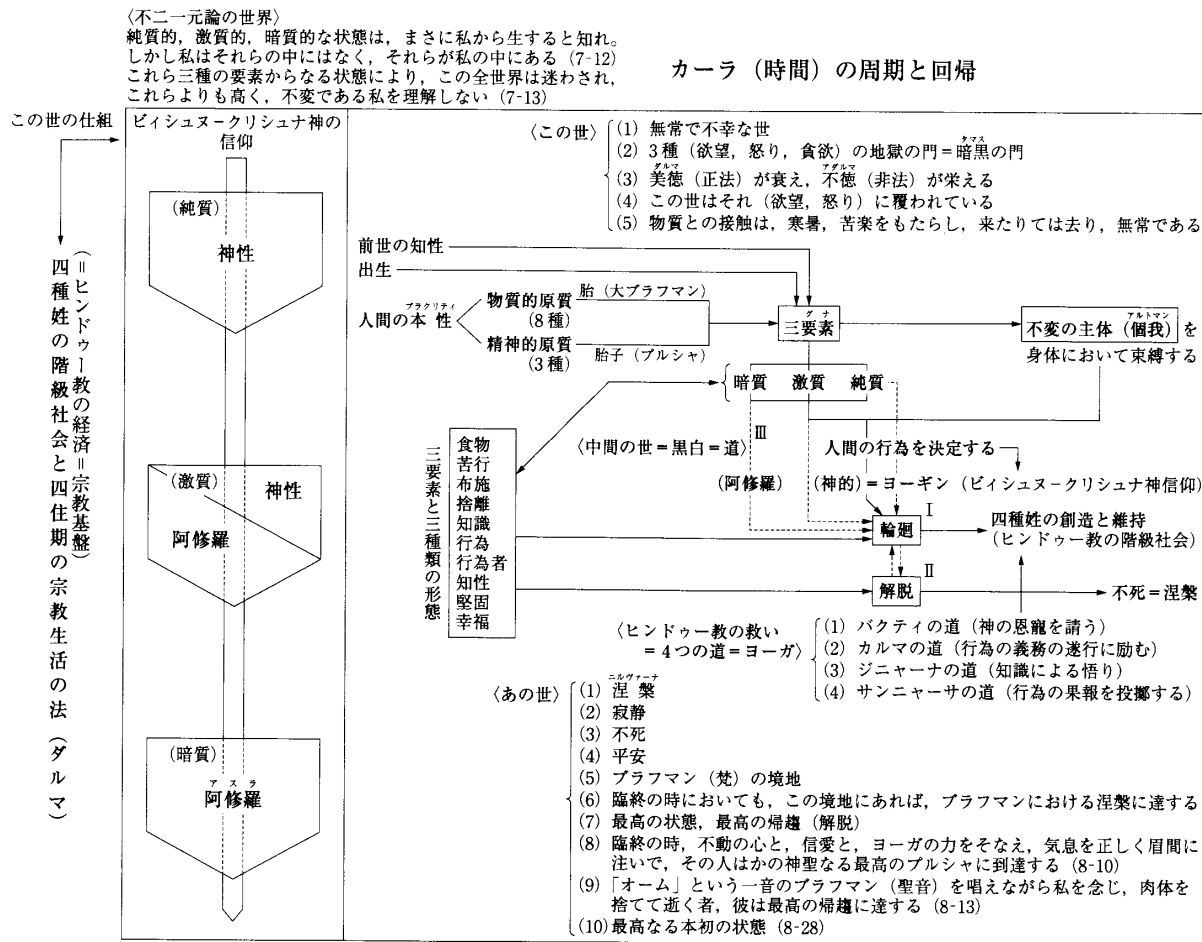


図2 『バガヴァッド・ギーター』の救いの構造

への道として体系化するのに成功するのであるが、この点でまさに、ヒンドゥー教の聖典となるのである。ちなみに、従来の解脱への3つの道がこの『バガヴァッド・ギーター』で体系化されたというのがヒンドゥー教の聖典に関する通説であったが、ここでは上村勝彦の研究に基づいて放擲のヨーガを加え、第四の道として展開するものである。すなわち、「知識は常修より優れ、瞑想は知識より優れ、行為の結果の捨離は瞑想より優れている」と、捨離 = 放擲は瞑想 ← 知識 ← 前世の常修の頂点に位置づけられているからである。

『バガヴァッド・ギーター』が描くインド社会に普遍的なこの世 = 世俗社会は四種姓の階層社会と人々の職能 (カースト) 行為の遂行とで維持されているが、生得の業理論によって秩序づけられている。この生得の業理論は図2に示される(i)前世の知性、(ii)出生そして(iii)人間の本性の3要素と精神的3原理との結合で人々を再生族と一生族とに分け、輪廻転生を生み出す。この世は業理論と輪廻を中心に秩序づけられる<sup>(53)</sup>。『ギーター』は(1)最高神ブラフマンを実在するものとして捕え、(2)最高神のプラクリティ (根本原質) で創造されるこの世の世界 = 表象界を大いなる幻力で覆われる化現の無常の世界と見做す不二元論 (ヴェーダーンター学説) を宗教理論とする。この実在神を心の中で一体化することは瞑想と静観の技術であるヨーガによって達成される。

『ギーター』では最高神ブラフマンをヴィシュヌ神に一体化する仲介として個我(アートマン)を知ることに専念する瞑想と静観のヨーガに信仰知を求めるのである。ここに『ギーター』は有神論=有我論的不二一元論をヒンドゥー教の宗教体系として体系化するのであり、四種姓の社会に対応する有機体的構成の宗教を形成するのである。

が、アルジュナは同じバラタ族のクル族(百人の王子、長男ドゥルヨーダナ)と王位継承を巡ってバーンダヴァ軍の戦士として参戦するが、戦争の原因を王権を返さないドゥルヨーダナの欲望、怒り、貪欲に根ざすものとなるのだが、他面、同族を滅ぼす大罪にその戦意を失ない、この世の阿修羅に陥ってしまうことを次のように嘆くのである<sup>(54)</sup>。

「一族の滅亡において、永遠なる一族の<sup>ダルマ</sup>美德(義務)は滅びる。美德が滅びる時、<sup>アダルマ</sup>不徳がすべての一族を支配する。

不徳の支配により、一族の婦女たちが墮落する。婦女たちが墮落すれば、<sup>ヴァルナ</sup>種姓の混乱が生ずる。

このような混乱は、一族の破壊者と一族とを地獄に導く。というのは、彼らの祖先は<sup>ビンダ</sup>団子と水の供養を受けられず、地獄に墮ちるから。

一族の破壊者の、<sup>ジャータ</sup>種姓を混乱させるこれらの罪過により、永遠なる階級の<sup>ジャータ</sup>美德(義務)と一族の美德は破壊される。

一族の美德が滅びた人々は、必ずや地獄に住むと我らは聞いた」

この世=現世の世俗社会を再生産し、秩序づけるために『ギーター』ではその宗教的経済制度として四種姓の<sup>ヴァルナ</sup>機能的組織(カーストの母胎的側面)と宗教社会制度として社会階級<sup>ジャータ</sup>序列(サブ・カーストの内婚制血統集团的側面)とを両輪にする統治(ガバナンス)構造をその中心に据えるのである。ヴァルナとジャータで組織されるこの家産制統治構造は(一)貪欲に心乱される不徳の支配と(二)婦女子の墮落による<sup>ヴァルナ</sup>種姓の混乱、(三)階級の<sup>ジャータ</sup>美德(義務)の破壊とを原因にする一族の滅亡により地獄に落ちて崩壊することを運命づけられている。だが、四種姓の母胎血統制度と宗教的社会階層序列とを両輪にするヒンドゥー教社会は『バガヴァッド・ギーター』の聖典を精神的支柱にするインド民族=バラタ族の歴史的家産国家の理念型として古代において発展し、今日においても依然として維持され続けるのである<sup>(55)</sup>。それゆえ、インド社会は「カースト的社会」として特徴づけられることとなる。ガンディーが不可触民制を第四のシュードラ階層に統合し、吸収させることで不可触民制解放の悲願としたのは『ギーター』の理念型社会=四種姓の社会を正統派ヒンドゥー教徒として理想化していたからであり、アンベードカルから批判されることになるのである。

しかし、インドの歴史に普遍化される四種姓の<sup>ヴァルナ</sup>母胎構造とヒンドゥー教的<sup>ジャータ</sup>社会階層序列を理念型として再生産し、永続化するヒンドゥー教は『マハーバーラタ』、『ラーマーヤナ』の二大叙事

詩をヒンドゥー教の聖典として、インド民族の中に浸透することで危機の都度、インドの救いを人格神=ヴィシュヌ=クリシュナ神の至高に求め、ガンディーをその使徒(マハトマ=聖仙のグル)として登場させるのである。

『マハーバーラタ』でのバラタ族の一族間争いは貪欲、怒り、欲望のドゥルヨーダナが阿修羅となることに原因を求めている。『ギーター』はバラタ族の業理論と輪廻を救う福音書と見做される。つまり、『ギーター』はこの世の苦しみを救うために戦士の義務(美德)を遂行し、ヴィシュヌ=クリシュナ神の道具となるアルジュナの解脱への福音書でもあった。したがって、アルジュナは「それでは、クリシュナ、人間は何に命じられて悪を行うのか、望みもしないのに、まるで力づくで駆り立てられたように」と、クリシュナ(聖バガヴァッド)に問うのである。

クリシュナ=聖バガヴァッドはこの世での欲望が人間の本性(プラクリティとグーナの組み合わせ)で生じ、主体(個我)を迷わす大なる幻力に覆われているからであると化現説を次のように告げる<sup>(56)</sup>。

「聖バガヴァッドは告げた。――

それは欲望である。それは怒りである。激質<sup>ラジャス</sup>という要素<sup>グーナ</sup>から生じたものである。それは大食で非常に邪悪である。この世で、それが敵であると知れ。

火が煙に覆われ、鏡が汚れに覆われ、胎児が羊膜に覆われるように、この世はそれ(欲望、怒り)に覆われている。

知識ある者の知識は、この永遠の敵に覆われている。アルジュナよ、欲望という満たし難い火によって。

感官<sup>マナス</sup>と思考器官<sup>ブッディ</sup>と思惟機能は、その拠り所であると言われる。それはこれらにより知識を覆い、主体(個我)を迷わせる」

かくて、この世は人間の本性(プラクリティと三グーナの組み合わせ)の激質及び暗質から生じる欲望の邪悪によって覆われ、知識も覆われて大火となって、人間を大食いにして欲望人の地獄と化す幻力<sup>マヤー</sup>の表象界となる。

この世で欲望、怒り、貪欲の3種の地獄の門=3種の暗黒の門の中で暴れる阿修羅<sup>アスラ</sup>は輪廻で生まれ変わり、ますますこの世を地獄と化す。しかし、大なる幻力<sup>マヤー</sup>に覆われる欲望人は実在神ブラフマンを信愛し、一体化することで救われ、善人となる。すなわち、実在する最高神ブラフマンは個我アートマンと一体化し、自己内省する知識によって至高の自在者になり、大なる幻力<sup>マヤー</sup>から苦しむ人々を解放し、解脱させる。最高神の人格神化は欲望の釘を取り除く信仰知となり、苦しむ人々の信愛の対象となるのである。インドの普遍的なこの世の阿修羅とその輪廻の永続性を立ち切る『ギーター』の救いの教えは一方で世俗社会=この世に生きる人間のプラクリティと要素<sup>グーナ</sup>から生じる純質を増大させて至高の自在者<sup>マヤー</sup>へ成長させ、大なる幻力<sup>マヤー</sup>で覆われている欲望、怒り、

貪欲を排除する人間の<sup>アートマン</sup>心の美徳を大きくすることを根本原理とするのである<sup>(57)</sup>。

『バガヴァッド・ギーター』はこの世を阿修羅にする3種の地獄の門=暗黒の門と輪廻の永続化を人間の本性に内在するものとして次のように位置づける<sup>(58)</sup>。

「彼ら(阿修羅的な人)は様々に心迷い、迷妄の網に覆われ、欲望の享受に執着して、不浄の地獄に墮ちる。

彼らは自惚れ、頑固で、財産に驕り酔いしれる。偽善的に、[正しい]教令によらず、名前だけの祭祀を行う。

彼らは我執、暴力、尊大さ、欲望、怒りを拠り所とする。妬み深い彼らは、自己と他者の身体に宿るこの私を憎んでいる。

憎悪する彼らは、残酷で最低の人であり、不浄である。私は彼らを、輪廻において、絶えず阿修羅な胎内に投げ込む。

彼らは阿修羅的な胎に入り、生まれるごとに迷妄に陥り、私に達することができず、それから最低の帰趨に赴く。

欲望、怒り、貪欲。これは自己を破滅させる、三種の地獄の門である。それ故、この三つを捨てるべきである」

前述した図2に示されているように、この世の人間は3つの要素に応じた3種類の人間に分類することができる。つまり、第一は純質を本性とする神性な人間、第二は激質を本性とする中間的な人間、そして、第三は暗質を本性とする阿修羅的な人間である。これら人間の<sup>ブラクリティ</sup>本性(物質的原理)に属する3種の<sup>グーナ</sup>要素に対応する3種類の人間はこの世の世俗社会で業の生活をし、輪廻とカーラ(時間)の周期と回帰の繰り返しの中で生き続けている。図2の左側でのこの世=業の世俗社会は(-)四種姓の<sup>ヴァルナ</sup>階級社会と(=)3要素に対応する3種類の人間の生活秩序とから成り立っている現象界であることが窺える。さらに、人間の本性に属する3要素とそれに対応する3種類の人間は(-)輪廻、(=)中間、(=)解脱のいずれかに帰入する運命にある。図2に依れば、暗質を本性とする人間と激質を本性とする人間は図2のIである輪廻に帰入し、また、激質の一部の人間は黑白2道によって(-)輪廻から梵界へ退転し、(=)他の道によって再び回帰するが、このように図2のIIIに示される如く輪廻と解脱を往ったり来たりする中間の道を辿る。そして、図2のIIの解脱へ帰入するのは純質によって神性を高める人によるのであり、ブラフマン、さらに涅槃に達する。とりわけ、激質の人間と暗質の人間に見出される欲望、怒り、貪欲の3種の地獄=暗黒の<sup>タマス</sup>門に帰入する阿修羅はクリシュナによって「輪廻において、絶えず阿修羅的な胎内に投げ込まれる。彼らは阿修羅的な胎に入り、生まれるごとに迷妄に陥り、私に達することができず、それから最低の帰趨に赴く」のである<sup>(59)</sup>。

『バガヴァッド・ギーター』は業理論と四種姓の階級社会を営むこの世の世俗社会を大いなる

マヤー  
 幻力で覆われている化現説を問題にする。この化現説は不二一元論の現象界を特徴づける。このことから化現説はカルマン（因果応報）とサンサーラ（靈魂輪廻）をこの世の宿命として見做す。大いなるマヤー  
 幻力に覆われるこの世の現象界から欲望人を救うのは『ギーター』の有我論的人格神への信仰知による解脱への道となる。かくて、『ギーター』は実在する最高神ブラフマンを知る個我（プルシャ）の至高を重視し、最高神ブラフマンを捕えて至高の自在者になることで覆っているマヤー  
 幻力から解放されて解脱する有我論的有神論を体系化する。『ギーター』は化現説のマヤー  
 幻力から解放するのに最高神ブラフマンの至高性を最高の知識として個我（アートマン）に認識させることを求める。欲望、怒り、貪欲の3種の地獄＝暗黒の門へ移行するのに決定的役割を果すのは(一)前世の知性、(二)出生、(三)人間の本性である。『ギーター』は幻力で覆われている地獄のこの世の現象界から人間を救うのに最高神ブラフマンが個我アートマン（プルシャ）と一体化し、至高の自在者になることを次のように説く<sup>(60)</sup>。

「プラクリティ（根本原質）とプルシャ（個我）とは、二つとも無始であると知れ、諸変異と諸要素とは、プラクリティから生ずるものと知れ。

プラクリティは、結果と原因を作り出す働きにおける因であると言われる。プルシャは、苦楽を享受することにおける因であると言われる。

というのは、プラクリティに宿るプルシャは、プラクリティから生ずる<sup>グル</sup>要素を享受するから、彼が要素と結合することが、彼が善悪の胎から生まれる原因である。

この身体における最高のプルシャは、近くで見る者、承認者、支持者、享受者、偉大な主、最高の自己と言われる」

かくて、人間の身体は本<sup>プラクリティ</sup>性の物質的原質と精神的原質とから成る<sup>グル</sup>要素を持って<sup>ヨーニ</sup>胎から生まれる。そして、この人間が本<sup>プラクリティ</sup>性と個我（＝魂）とを有するが、こうした人間の構成（本性と個我）を生み出すのは宇宙創造＝一切主である「私」（＝クリシュナ）とブラフマンとの共同行為によるのである。すなわち、「私」（＝クリシュナ）は母のブラフマンである胎に父である私の胎子（種子）を置き、「それから万物の誕生」、つまり、人間をこの世に生み出す<sup>(61)</sup>。この人間は本<sup>プラクリティ</sup>性によって3要素（<sup>グーナ</sup>純質、<sup>サットヴァ</sup>激質、<sup>ラジャス</sup>暗質、<sup>タマス</sup>）を持って生まれ、さらに「不変の<sup>デーヒン</sup>主体（<sup>アートマン</sup>個我）」を魂として心蔵の空所<sup>(62)</sup>に出現させる。しかし、身体の本<sup>プラクリティ</sup>性と個我<sup>アートマン</sup>とは時に一体化し、時には分離して機能する。

人間の身体を構成する本性の物質的原質と精神的原質とは「土地」（人間の身体）とその変異と呼ばれ、次の身体機能を現わす<sup>(62)</sup>。

「[五種の] 元素（地、水、火、風、虚空）、<sup>アハンカーラ</sup>自我意識、<sup>ブッディ</sup>思惟機能、非顕現のもの（プラクリティ）、十の感官（耳、皮膚、眼、舌、鼻の五感と発声器官、手、足、排泄器官、生殖器官の五行動器官）と一[思考]器官（意）、五の感官の対象（音声、触、色、味、香）、

欲求, 憎悪, 苦楽, [身体的部分の] 集合, 意識, 堅固 (充足)。以上, 「土地」とその変異が簡潔に説かれた」

以のように, 人間は本性の物質的原質を(一)5種の元素, (二)自我意識, 思惟機能, (三)10の感官と思考器官, (四)5の感官の対象, (五)欲求, 憎悪, 苦楽, 意識等と位置づけ, これらから構成される「土地」(身体)を有している<sup>(63)</sup>。

他方, 『ギーター』は人間の本性の精神的原質を個我(プルシャ=魂)と呼び, 前述した「土地」(身体)を知ることのできる者を「土地を知る者」, 又は「アールトマン (=自己)に関する知識」を知るものとして見做す。次に, 『ギーター』は幻力で覆われる現象界から解放する救い主を最高神(ブラフマン)に求め, 心の個我(アートマン)と一体化して至高の自在者になる人を純質な人間, 或いは神性の人間と位置づけ, 物質的原質を制御し, 純質を高めて解脱に専念する個我の働らきを次のように指摘する<sup>(64)</sup>。

「慢心や偽善のないこと。不殺生, 忍耐, 廉直。師匠に対する奉仕, 清浄, 堅い決意, 自己抑制。

感官の対象に対する離欲。我執のないこと。生老病死苦の害悪を考察すること。

妻子や家などに対して執着や愛着のないこと。好ましい, または好ましくない出来事に対し, 常に平等でいること。

ひたむきなヨーガによる, 私への揺ぎない信愛。人里離れた場所に住むこと。社交を好まぬこと。

常に自己に関する知識に専念すること。真知の目的を考察すること。以上が「知識」であると言われる。それと反対のことが無知である。

私は知識の対象を告げよう。それを知れば人が不死(甘露)に達するところの。それは, 無始なる最高ブラフマンである。それは有とも非有とも言われない」

人間が本性の物質的原質と精神的原質とで3要素を構成し, そのうち, 激質と暗質の高まりに汚染され個我=自己の精神的原質の不浄によって欲望, 怒り, 貪欲に捕われると, 阿修羅となり, 輪廻の地獄を繰り返すこととなる。が, 人間は物質的原質を制御し, 行為, 家, 財産を捨離, 或いは離欲する精神的原質の個我の働きで知識に専念すると, 最高ブラフマン(梵)と合一し(梵我一如), 神性の人間として解脱(不死)することとなる<sup>(65)</sup>。

結論づけるならば, 図2に示される人間の本性と3要素の関係は人間の生死を一方でI輪廻へ, 他方, II解脱へと両極に分解させるが, さらに, III中間の道(黒白2道)へも選択させる。こうした3つの道への選択を決めるのは各人の個我の働きに関する。『ギーター』は個我の知で最高神ブラフマンと一体化し, 至高の自在者或いは純質な人間になることを救いの道として選択

することを求めるのであり、不二一元論の有神論を体系化するのである。

『バガヴァッド・ギーター』は図2のようにこの世=世俗社会とあの世=涅槃を往ったり来たりする人間の3つの道(I輪廻, II解脱, III中間)を選択する3種類の人間を類型化する。したがって、『バガヴァッド・ギーター』は第四のヴェーダとしてヒンドゥー教の聖典と位置づけられるのは3つの道と3種類の人間の対応関係を人間の本性<sup>ブラクリティ</sup>にまで遡って明らかにし、その根底にある人間の行為<sup>アートマン</sup>を心の個我と結びつけ、最高神ブラフマンへの信仰知にまで体系化する不二一元論の有神論として宗教理論化するのに成功するからである。

が、『バガヴァッド・ギーター』は人間の行為<sup>アートマン</sup>を個我、さらに最高神ブラフマンに結びつけ、解脱することを不二一元論として宗教理論化し、その解脱の道をヨーガとの関係で明らかにするが、その際、通説では3つの道=ダルマが示されている。が、しかし、ここでは4つの道=ヨーガとして新しく提示し、その解脱を検証しようとするものである<sup>(66)</sup>。

## (二)『バガヴァッド・ギーター』のヨーガ形態—ヒンドゥー教の宗教意識

図2に窺えるように、人間の主体(個我)が3要素<sup>デーナ</sup>を超越して解放され、主体(個我)と最高神ブラフマンとの合一に達することを解脱と呼ばれるが、この人間の行為を聖化する4つの道=ヨーガとは(一)カルマの道=ヨーガ(行為の業務に励む)、(二)ジニャーナの道=ヨーガ(知識に励む)、(三)バクティの道=ヨーガ(神の恩寵を請う)、(四)サンニャーサの道=ヨーガ(行為の果報を投擲する)である。これら4つの解脱への道は人間の個我<sup>アートマン</sup>が行為の果報を放擲する福音を最高神(ブラフマン)の真理として捕え、個我<sup>アートマン</sup>の最高神ブラフマンへの一体化を最高の境地とするのであるが、具体的には瞑想と静観とで達することからヨーガ形態を採用することを不可避にする。このヨーガ形態は(1)生前解脱のヨーガと(2)臨終ヨーガとの二つに分かれる。(1)の生前解脱のヨーガはこの世で、(2)の臨終ヨーガはあの世での解脱=法悦である。

### (1)ヨーガ形態—生前解脱のヨーガ

『バガヴァッド・ギーター』はこれら4つの道=ヨーガを生前(生仏)<sup>ブノシス</sup>解脱(=開悟)の4種類と見做し、マックス・ヴェーバーに依れば、中国の家父的宗教に対して有機体的宗教をヒンドゥー教として体系化することを意味する。が、同時に、古代のヴェーダーを凌駕し、祭礼至上主義(儀礼)を超える個人の瞑想(ヨーガ)による神秘主義的体験での法悦(=熟睡の状態)は宗教倫理でなく(キリスト教)、自己<sup>アートマン</sup>に関する知識に専念する社会倫理行為の道(=義務)となるのである。まさに、有機的<sup>ヴァルナ</sup>四種姓の社会と業理論に対応する個人<sup>アートマン</sup>或いは階層<sup>ジャータ</sup>毎に決められる有機的宗教がヒンドゥー教を特徴づけることになったのは『バガヴァッド・ギーター』の救いの構造に収斂する(一)サーンキャ学派の二元論的教説と(二)ヴェーダーンタータ学派の宇宙論的仮象にかんする一元論的教説とを集大成したからであるが、このことは前に述べたところである。こうしたM・ヴェーバーのヒンドゥー教の位置づけは西洋のキリスト教、さらに中国の宗教(仏教及び道教)とを比較することから導きだされ、ヒンドゥー教を「アジア宗教の救済理論」の中に据え、一つの理念型と

して把握することになるからである<sup>(67)</sup>。

この世とあの世はプラクリティ(根本原質)とプルシャ(精神原質)とから形成され、その中介となるのが現象界(万物(=欠陥に覆われている))の業理論=輪廻の世界である。この現象界はブラフマン(宇宙一切主)の幻力とプラクティによって創造され、「苦の巢窟である無常」な世界である物質(=四種姓)の社会である。この物質の世界への我執から精神は人間の自己として精神原質の開悟によって解放されることで救済されるが、その際、物質の行為は幻力の物的現象界(貧富, 所有, 財産)を生み出すものとなる。したがって、精神の営なみ(道=ヨーガ)はそうした幻力の物的現象界のペール(=この世の無常=盛者必衰)を剥す知識(=真理)を自己の中に発見することで聖化される。M・ヴェーバーがヒンドゥー教を特徴づける精神の営なみは物質の行為の果報を放擲させる「世俗内的行為の世俗的無関心」(=古典期インドの知識人倫理)として現われ、『バガヴァッド・ギーター』の救いの構造のコアを成す<sup>(68)</sup>。

精神の営なみが世俗的行為(物質の行為)の成果を放擲し、世俗=業の世界(輪廻)から解放され、「熟睡の状態」に達する世俗逃避的神秘主義(寂靜)に達するためには古典的な瞑想=ヨーガを通して行われるのである。ヨーガは理論知と実践知を統合する新しい宗教の信仰知(知識の救済貴族主義)として現われ、人間の聖化に不可避な道となる。『バガヴァッド・ギーター』がこのヨーガに人間が聖化に達する道を求め、救いの構造のコアに据えたことはヨーガを通して救済貴族主義、つまり、知識人宗教意識が従来のバラモンの祭礼至上主義に取って替わることを意味する。人間を聖化する精神の営なみは『バガヴァッド・ギーター』を特徴づけ、ヒンドゥー教の救済知識貴族主義を完成するのであるが、古典的ヨーガを精神的禁欲の営なみとし、カリスマ的グルを中心とする「知的文化の宗教達人共同態の秘義的理論」(=知識人宗教意識)へ収斂するのである。

『バガヴァッド・ギーター』での精神の行為としてのヨーガの重要性は聖バガヴァッド(クリシュナ)によって次のように強調される<sup>(69)</sup>。

「聖バガヴァッドは告げた。

私はこの不滅のヨーガをヴィヴァスヴァット(太陽神)に説いた。ヴィヴァスヴァットはそれをマヌ(人類の祖)に告げ、マヌはそれをイクシュヴァーク(王名)に告げた。

このように王仙たちはこの伝承されたヨーガを知っていた。しかしそのヨーガは、久しい時を経て失われた。

私は今、まさにこの古のヨーガをあなたに説く、あなたは私を信愛して、友であるから。実にこれは最高の秘説である。」

解脱への道であり、その「最高の秘説」であるヨーガによる人間の聖化はサーンキャ二元論、つまり、内面的二面性(認識する精神と認識される精神(意識))を体験する知識神秘主義(=信



仰宗教意識)として現われる<sup>(70)</sup>。

『バガヴァッド・ギーター』が神秘主義的瞑想をヨーガとして重要視するのはヒンドゥー教の「最高の秘説」となるからである。解脱への道となるヨーガについてその体得への訓練は二カ所で触られているが、そのうちの一カ所は次のようにヨーガの姿勢方法を明らかにする<sup>(71)</sup>。

「清浄な場所に、自己のため、高すぎず低すぎない。布と皮のクシャ草で覆った、堅固な座を設け、

その座に坐り、<sup>マナス</sup>意(思考器官)を専ら集中し、心と感官の活動を制御し、自己の清浄のためにヨーガを修めるべきである。

体と頭と首を一直線に不動に保ち、堅固(に坐し)、自らの鼻の先を凝視し、諸方を見ることなく、

自己(心)を静め、恐怖を離れ、梵行(禁欲)の誓いを守り、意を制御して、私に心を向け、私に専念し、専心して座すべきである。

このように常に専心し、意を制御したヨーギンは、<sup>ニルヴァーナ</sup>涅槃をその極致とする、私に依拠する寂靜に達する。

食べすぎる者にも、全く食べない者にも、睡眠をとりすぎる者にも、不眠の者にも、ヨーガは不可能である。

節度をもって食べ、散策し、行為において節度をもって行動し、節度をもって睡眠し、目覚めている者に、苦を滅するヨーガが可能である。

心が制御され、<sup>アートマン</sup>自己においてのみ安住する時、その人はすべての欲望を願うことなく、「専心した者」であると言われる」

以上はかなり長文になるヨーガの姿勢とその知識神秘主義的瞑想の宗教的意識はヒンドゥー教の大衆信仰を確立するコアとして求められる。それゆえ、ヨーガは大衆の誰もが日常生活の中で禁欲的精神の行為として営まれるものとして位置づけられる。『バガヴァッド・ギーター』が求めるヨーガは次の3点に要約される。

第一は坐って(イ)「体と頭と首を一直線に不動に保ち、自らの鼻の先を凝視し」、(ロ)「自己(心)を静め」「意を制御して」、(ハ)「私(クリシュナ)に専念し」、その結果、(ニ)「涅槃をその極致とする、私に依拠する寂靜に達する」法悦(=知識)への知識神秘主義的瞑想を個人的次元で体験する主知主義的静観技術を確立することに求めている点である<sup>(72)</sup>。

第二はヨーガ実習によって涅槃の寂靜(=熟睡の状態)に達する知識(法悦)を内面的二面性として把握するが、日常生活の中で合理的禁欲的な静観訓練で到達するが、このことから、非合理的苦行や呪術師のハタ・ヨーガ(曲芸的坐法)を排除している点である。日常生活の中でのヨーガによる静観訓練とは「節度をもって食べ、散策し、行為において節度をもって行動し、節度を

もって睡眠し、目覚めている者に、苦を滅するヨーガ」を体得することを意味し、大衆のヨーギン化に道を開くのである。

第三は大衆をヨーギンへ導くヨーガ実習を日常生活の中で禁欲的な精神の行為として営なみ、その中で内面的二面性、つまり、神への信愛、万物・宇宙への同情、そしてこの世の世俗社会（業の果報）への捨離、或いは放擲による世俗的無関心を心の中に生み出す静観訓練をヨーガ実習で体験させ、宗教的意識を育くもうとする点である。ヨーガ実習が人格神ヴィシュヌークリシュナ信仰への宗教的意識を内面的二面性に根源を有する形で育くむこととなるが、こうしたヨーガ実習に基づく宗教的意識は静観＝熟睡の状態の中に自己を神的なものとの合一（梵我一如）することで法悦（＝知識）の究極状態（涅槃）に達するが、同時にこの世の仮象＝世俗社会の表現界を覆う大いなる幻力を排除し、実在する最高神を真理として知り、さらに信愛しようとする達人宗教意識（一元論的汎神論）を生むのである。こうした人格神（ヴィシュヌークリシュナ神）への信愛はヒンドゥー教への信仰意識となって現われる。つまり、「心が制御され、自己においてのみ安住する時、その人はすべての欲望を願うことなく、「専心した者」であると言われる」こととなるのであり、ここに人格神を信仰するヒンドゥー教は大衆の中に「専心した者」の信徒を見出し、この世の業から救済する宗教としてインドの大地に根づくのである<sup>(73)</sup>。ヨーガは日常的な生活の場で瞑想と静観を通して自己を最高神に一体化する信仰知と見做され、生前解脱へ導く道具となるのである。

## (2)ヨーガ形態—臨終ヨーガ

これまで述べてきたヨーガ実習は生前解脱を達成する瞑想—静観—法悦（知識）への知的精神の行為＝日常的ルーティンの訓練の営なみであったが、結局、精神的自我の魂＝霊を至高の自在者として見出そうとするものであった。が、『バガヴァッド・ギーター』は生前解脱のヨーガ実習に対して臨終解脱としてのヨーガ実習を掲げ、理念型の一つとして次にもう一つのヨーガ形態を告げる<sup>(74)</sup>。

「臨終の時、不動の意と、信愛と、ヨーガの力をそなえ、氣息を正しく肩間に注いで、その人はかの神聖なる最高のプルシャに到達する。

ヴェーダ学者はそれを不滅のものと述べ、離欲の修業者はそれに入り、人々はそれを望んで梵行（禁欲行）を行う。その境地をあなたに簡潔に語ろう。

身体は一切の門を制御し、意（思考器官）を心中において遮断し、自己の氣息を頭に止め、ヨーガの保持に努め、

「オーム」という一音のブラフマン（聖音）を唱えながら私を念じ、肉体を捨てて逝く者、彼は最高の帰趨に達する。

常に心を他に向けることなく、絶えず私を念ずる者、その常に〔私に〕専心したヨーギンにとって、私は容易に到達される。

私に到達して、最高の成就に達した偉大な人々は、苦の巣窟である無常なる再生を得ることとはない。

ブラフマー  
梵天の世界に至るまで、諸世界は回帰する。アルジュナよ。しかし、私に到達すれば、再生は存在しない」

この臨終のヨーガは人間が臨終を迎える際、(一)「氣息を正しく眉間に注いで」、(二)「身体は一切の門を制御し、意を心中において遮断し」、(三)「自己の氣息を頭に止め、ヨーガの保持に努め」、(四)「オーム」という一音のブラフマン(聖音)を唱えながら私(クリシュナ)を念じ、(五)「肉体を捨てて逝く」なら、梵天に達する。しかし、精神的自我の魂(=靈)が臨終ヨーガで肉体=身体(プラクリティ)から遊離して、梵天に達しても黑白2道によって再生=輪廻し、「苦の巣窟」に舞い戻って回帰してしまうが、しかし、「オーム」を唱えてクリシュナを信愛し、「専心する者」(=信徒)になるなら、個我の主体はブラフマンの最高の帰趨に達し、再生することなくブラフマンの涅槃に到達して止まることとなる。かくて、臨終のヨーガによって個我は肉体=身体から離れて、あの世でブラフマン=最高神(ビシシュヌークリシュナ)と合一し、永遠の夢なき眠りに陥いる(=無感動的神秘的恍惚・愛の無宇宙主義的オイフォーリー(病的快感)のであり、ヒンドゥー教徒の宗教意識として最高の帰趨に達する。こうした臨終ヨーガはヒンドゥー教徒を解脱として自己と最高神と合体し、最高の帰趨である涅槃へ導く救済宗教の道具=機械となるのである<sup>(75)</sup>。

### 第3節 『バガヴァッド・ギーター』の四種姓の社会と4つの道=ヨーガ

『バガヴァッド・ギーター』が四種姓の社会=業の輪廻からの解脱として4つの道(=ヨーガ)を示し、浄化の道具としてヨーガの2形態、つまり生前解脱のヨーガと臨終ヨーガを重要視したことは前に述べたところである。

#### (一)四種姓の社会=この世の業理論

『バガヴァッド・ギーター』がヒンドゥー教の第四のヴェーダとして位置づけられる場合、その理由としてあげられるのは次の3点である。

第一は『バガヴァッド・ギーター』が『マハーバーラタ』全18巻の中で第6巻に収められ、第四のヴェーダと呼ばれて主にヒンドゥー教の聖典(宗教書)として位置づけられている点である。この『マハーバーラタ』がテーマにしている点はインド社会の有機体的構成と人間の生き方とに宗教的意義を与え、聖化することである。したがって、『バガヴァッド・ギーター』は人間を聖化する有機体的宗教としてヒンドゥー教を特徴づけることとなる。具体的には戦士・王族のアルジュナの迷いを救済する中にヒンドゥー教の宗教的意識と救いの構造、つまり、人格神=最高神の恩寵と保護にその救いを求めている点である。

第二は『バガヴァッド・ギーター』がインド社会の有機体的構成(四種姓<sup>ヴァルナ</sup>の社会)を業理論で再生(輪廻)することを断き切り、解脱するためにバラモンの祭式至上主義から4つの道=ヨーガを中心にする知識神秘主義(法悦)、とりわけこの法悦を精神的自我<sup>アートマン</sup>の神秘的信仰として体系化するのに成功している点である。

第三は『バガヴァッド・ギーター』が仏教の無我論=空の理論、さらにジャイナ教及びイスラーム教の唯一神信仰に対して有機体的宗教を唱え、生前解脱として大衆宗教の性格を顕現化し、また、有神論的不二一元論を宗教理論に体系化する。この大衆宗教の性格は英雄叙事詩である『マハーバーラタ』と『ラーマヤナ』の口承文芸によって大衆の中に浸透している点である。ガンディーが『バガヴァッド・ギーター』を寺院で子守歌として聞きながら成長し、さらに、暗記して人間の聖化を真理として探究するサティヤグラハの聖典として取組んだことは前に述べたところである。

### (1)『マハーバーラタ』と四種姓の社会

が、『バガヴァッド・ギーター』が有機体的社会構成=四種姓<sup>ヴァルナ</sup>の社会に対応するインドに特有な有機体的宗教としてヒンドゥー教を成立させたことは第四のヴェーダと呼ばれる所以であるが、しかし、アジアの宗教の中でも特異な存在となるのである。したがって、本節ではヒンドゥー教を特徴づけるこの有機体的社会構成と有機体的宗教との対応関係が業理論と解脱の形態を決定づけることから、『マハーバーラタ』の歴史的社會を四種姓の社会として把握し、古代社会のインドを特徴づけている点を最初に『マハーバーラタ』の中から検証する。

クル族の10代目ヤヤーティ王はバラモンであるシュクラの娘(デーヴァヤーニー)を森の中で見つける。しかし、娘はヤヤーティ王に夫になるように求める、これに対して、ヤヤーティはこの結婚に反対し、結婚を強行するなら、その結果、カースト<sup>ジャーティ</sup>身分の混血=混合で四種姓<sup>ヴァルナ</sup>の社会(=有機体的社会構成)を崩壊へ導くことになることになると次のように説いて、消極的態度を示すのである<sup>(76)</sup>。

「ヤヤーティは言った。

「ウシャナスの娘さん、あなたに幸せがあるように。わかって下さい。美しい女よ、私はあなたにふさわしくありません。デーヴァヤーニーよ、あなたの父上は王族にあなたを嫁がせないでしょう(バラモンの娘が王族と結婚することは適切でないといわれる)。」

デーヴァヤーニーは言った。

「バラモンは王族<sup>クシャトラ</sup>と混交しています。王族もバラモンと結びついています。あなたは聖仙で、聖仙の息子です。ナフシャの子よ、さあ、私を娶って下さい。」

ヤヤーティは答えた。

「美しい女よ、四つの種姓<sup>ヴァルナ</sup>は一つの体(神人プルシャの体)から生じました。しかし、彼らの法<sup>ダルマ</sup>(職分)は異なり、何が清浄であるかも異なります。それらのうちでバラモンが最高で

す。」

ヤヤーティと娘との間の会話はインドの有機体的社会構成を四つの種姓<sup>ヴァルナ</sup>に求め、それぞれの階級<sup>ジャヤーティ</sup>の法<sup>ダルマ</sup>（職分）が相違し、清浄も異なっている点を浮き彫りにし、宇宙創造主（宇宙巨人の供儀）の体からの起源を明らかにしている。つまり、「四つの種姓<sup>ヴァルナ</sup>は一つの体（神人プルシャの体）から生じました。しかし、彼らの法<sup>ダルマ</sup>（職分）は異なり、何が清浄であるかも異なります。」と、宇宙創造主（宇宙巨人）の一つの体から分れ、形成される四つの種姓はインドの太初に造られるのである。この四種姓の社会はそれぞれの階級<sup>ジャヤーティ</sup>毎に内婚制を展開し、母胎血統集団として機能する。それゆえ、ヤヤーティはバラモンの娘と結婚して、「種姓を混乱させるという大なる非法<sup>アダルマ</sup>」を犯すことに王族・戦士職能集団<sup>クシャトリアヴァルナ</sup>の立場（カースト階層<sup>ジャヤーティ</sup>）から苦しむのである<sup>(77)</sup>。

だが、ヤヤーティは娘（デーヴァヤーニー）と結婚し、息子達を儲けたが、他方、もう1人の妃であるシャルミンターとの間にできた末子の息子（プール）に老いを引き受けさせ、代りに息子プールの若さを得た。彼は引続き王国に君臨し、四種姓の社会を次のように繁栄させ、統治に成功するのである<sup>(78)</sup>。

「彼は祭祀により神々を満足させ、祖霊祭により祖霊を満足させた。好ましい恩恵を与えることにより不幸な人々を満足させ、願いをかなえることにより最高のバラモンたちを満足させた。飲食により客人を、守護することにより実業者<sup>ヴァイシユ</sup>を、慈悲深さにより従僕<sup>シュードラ</sup>を満足させた」

ヤヤーティが統治する王国は四種姓<sup>ヴァルナ</sup>の社会（＝有機体的社会構成）として発達している。四種姓とは四つの職能集団を指す。第一はヤヤーティの属する王族・戦士<sup>クシャトリーナ</sup>、第二は祭司のバラモン、第三は実業者<sup>ヴァイシユ</sup>（商手工業者、農民、庶民）、そして第四は従僕<sup>シュードラ</sup>（召使、奴隷、使用人）の四職能集団を形成し、別々の階層（カースト）を組織するのである<sup>(79)</sup>。

が、同一階層の内婚制による結婚はこれら四種姓<sup>ヴァルナ</sup>の階層を清浄にし、純血にするのに大きな役割を果たすことから同じ種姓同志の結婚を原則とし、前に述べた王族・戦士の息子とバラモンの娘との結婚による混血＝混交は四種姓の崩壊へ導くものとして避けることを法とし、美德とするのである。異なる種姓間の結婚で四種姓の社会を危機に陥し入れたのはヤヤーティより遙か前に遡ったクル族パウラヴァ家系のドウフシャンタ王の治政期のことである。この王は王国を建て、法<sup>ダルマ</sup>にかなった実利に専念し、四種姓<sup>ヴァルナ</sup>を保護し、混血を次のように避けていた<sup>(80)</sup>。

「パウラヴァの家系にドウフシャンタという、四辺に至る大地の守護者である強力な王がいた。この戦いにおいて常勝の、無敵の王は、あまねくすべての土地を領有し、海に囲まれた国土、蛮族や林住族に及ぶすべての国土、四姓（バラモン、クシャトリーナ、ヴァイシヤ、シュードラ）の人々の住む海に至るまでの国土を有していた。この王が統治している間は、人々は

四姓の混合はなく、強制的に税を取る人々もなく、誰も罪悪を犯すこともなかった。その王の治世には、人々は法ダルマにかなった楽しみを享受し、法と実利アルタに専念していた。また、その王の治世には、盗みの恐れもなく、飢えの恐れもなく、病気の恐れもなかった。四姓は各々の法（本務）により満足し、願望を抱いて神事をするとはなかった」

ドゥフシャンタ王は王国の繁栄を四種姓アルタの实利に求めていた。四種姓の間には「混合はなく」、それぞれの「法ダルマと実利アルタに専念していた」のである。かくて、この王国の繁栄を持たず「四姓は各々の法（本務）により満足し」、職能集団として有機体的構成を形成する。だが、この王国で「四姓の混合はなく」、四姓の純血が守られていたが、このカースト制度の純血を破ったのはドゥフシャンタ王自身であり、結婚問題に根ざすのである<sup>(81)</sup>。

ドゥフシャンタ王は森に鹿狩りに行ったが、大仙カーシャパ族カヌヴァに会いたくなり、訪ねると娘のシャクンタラーに会った。そこで、彼は娘の美しさと高貴さに魅かれて求婚し、結婚をガンダルヴァの作法（自由恋愛による結婚）に基づきたいと申し込むのである。四種姓の社会では結婚を8種類に分け、四種姓の純血を維持していたのである。ドゥフシャンタ王は6番目のガンダルヴァの結婚式を選んだ理由について次のように説いた<sup>(82)</sup>。

「合計、八種の合法的な婚礼があると伝えられる。すなわち、ブラーフマ、ダイヴァ、アールシャ、ブラージャパティヤ、アースラ、ガンダルヴァ、ラクシャサ、そして、第八がパイシャーチャである。スヴァヤンブー（梵天）の息子マヌは、順を追ってそれらの適法なることを述べた。最初の四種はバラモンの場合に称揚されると知れ。最初の六種は、順次に、王族の場合に適法であると知れ。王族の場合、ラクシャサも許される。実業者と従僕の場合はアースラも許される。[最初の]五種のうちの三種は適法で、二種は適法でない。パイシャーチャとアースラとは、決して行なうべきものではない。以上のような作法により[結婚]すべきである。これが法の帰趨であるとされる。だから、ガンダルヴァ婚とラクシャサ婚は、王族の場合には合法的なのである。恐れることはない。その一つ、あるいは混った形の結婚が行なわれるべきである。この点に疑問はない。

私はあなたを愛し、あなたは私を愛している。ガンダルヴァ婚により、妻となって欲しい」

辻直四郎の婚姻に関する研究に基づいて8種類の結婚式は四種姓ヴァルナごとに分類すると次の組み合わせとなる<sup>(83)</sup>。

- (-)バラモン—ブラーフマ(娘の父が婿を一方的に選択)、ダイヴァ(施主が祭官に娘を授与する)、アールシャ(娘の父が牛一対を受けとる売買婚)、ブラージャ(婿側は贈物として牝牛100頭を嫁の父に贈る売買婚)

(二)王族・戦士<sup>クシヤトリヤ</sup>—ブラーフマ, ダイヴァ, アールシャ, ブラージャ, パティヤ, ガーンドルヴァ  
(自由恋愛婚), ラークシャサ (奪掠婚)

(三)実業者と従僕<sup>ヴィシヤ シュードラ</sup>—ブラーフマ, ダイヴァ, アールシャ, ブラージャ, パティヤ, アースラ (売買婚), ガーンドルヴァ, ラークシャサ

このように四種姓<sup>ダルマ</sup>は法として各々の結婚式の形態を通して純血を維持することに努め、慣習として確立するのである。

シャクンタラーは梵天<sup>ブラフマー</sup>の娘メーナヤとバラモンのヴィシュヴァーミトラとの間に生まれ、前述したヤヤーティ王とバラモンの娘デーヴァヤーニーと類似の混血=混交の結婚であった。ドゥフシャンタ王とシャクンタラーの間に生まれた息子はバタラと名づけられ、『マハーバーラタ』のバラタの家系となる。このバラタの家系は次の図3に示される『マハーバーラタ』の2つの相戦うカウルバア族とバーンダヴァ族へ分かれていく<sup>(84)</sup>。

バタラ族の系譜であるこの図3の中心人物の一人はサティヤヴァティとその息子ヴィヤーサである。というのもヴィヤーサはアンビカーとの間でドリタラーシトラを生み、他方アンバーリカとの間でバーンドゥを生み、バラタ族(クルー族)間でのインドを二分にする戦争を生じさせる息子達の父親になるからである。

サティヤヴァティの生誕は神秘的叙事詩的である。父親のウバリチャラ(ヴァス)王はチェーディ王国を併合し、同時に苦行に専心して神々の王インドラを凌駕する程度の聖仙となり、インドラを脅やかす。インドラは苦行より王国の統治に専心することをヴァス王に次のように告げた<sup>(85)</sup>。

「王よ、地上における法を混乱させてはならぬ。それを守れ。法が保たれたら、それは全世界を維持するであろう。汝は常に専念し、心を統一し、世俗の法を守れ。法を守れば、永遠にして清浄なる世界に到達するであろう……」

王よ、チェーディにおいては、すべての種姓<sup>ヴァルナ</sup>(四姓)が常に自己の法(本務)を守る。そして、三界(全世界)にあるようなもので汝に知らぬものはない」

インドラから空中飛行ができる天車<sup>ヴィマーナ</sup>を送られたヴァス王はチェーディ王国を併合する。このチェーディ王国は「すべての種姓<sup>ヴァルナ</sup>(四姓)が常に自己の法(本務)を守る」有機体的社会構成を形成している。ヴァス王は天車に乗り、祖霊供養のための鹿狩りをするので森の中に入ったが、しかし妻ギリカーの受胎を想い射精する。彼は木の葉で受け、鷹に妻の所へ運ぶよう命じたが、途中で川の中に落としてしまう。が、美しい天女で呪術のため魚になっていたアドリカーはヴァスの精液を飲み双子の人間を生んだ。一人の男児はマツヤ(魚の意)と名づけられ、ウバリチャラ王を継いだ。もう一人の女兒はサティヤヴァティー(真理の女の意)と名付けられ、漁師のところまで育てられて大きくなった。聖仙バラージャラは聖地巡礼中の途中、川の渡場でサティヤヴァ

ティと交った。サティヤヴァティは男児のドゥヴァイパーヤナ（ヴィヤーサ）を生んだ。バタラ族の祖父となるヴィヤーサは『マハーバーラタ』での主役を次のように果す<sup>(86)</sup>。

「パランダヴァ兄弟の祖父である。彼は生まれるやいなや、その意思により急速に体を成長させた。この誉れ高い人は、ヴェーダ聖典とその補助学<sup>イティハース</sup>と叙事詩とを修得した。

何人<sup>なんびと</sup>も、苦行、ヴェーダの学習、誓戒、断食、子孫、祭祀にかけて彼を凌駕することはなかった。最高のヴェーダ学者である彼は、一つのヴェーダを四つに配分（ヴィヤス）した。[だからヴィヤーサと呼ばれる。] 彼は高きもの低きものを知る梵仙であり、聖者<sup>カヴィ</sup>（詩人）であり、誓いを守り、清浄であった。高名であり福德の誉れ高い彼は、シャンタヌの家系を維持するため、バーンドゥとドリタラーシトラとヴィドゥラを生んだ」

図3のバラタ族間の王位継承を巡ってドゥルヨーダナ（百人の王子）とユディシトラ（5人の王子）との間で大戦争が起こり、ユディシトラの勝利となった。が、戦士<sup>クリシュリナ</sup>アルジュナの息子アビマニュの家系を継ぐパクリシットとジャナメージャナは王国を統治するが、蛇の呪術に捕われ、苦しむのである。特に、パクリシット王は鹿狩りで森に入った時、バラモンの聖仙シュミーカに鹿の行方<sup>いくえ</sup>を聞いたが修行中のため答えなかったため怒って死んだ蛇を肩にかけて帰った。これを聞いた聖仙の息子シュリギンは苦行の力で竜王タクシャカに報復させた<sup>(87)</sup>。

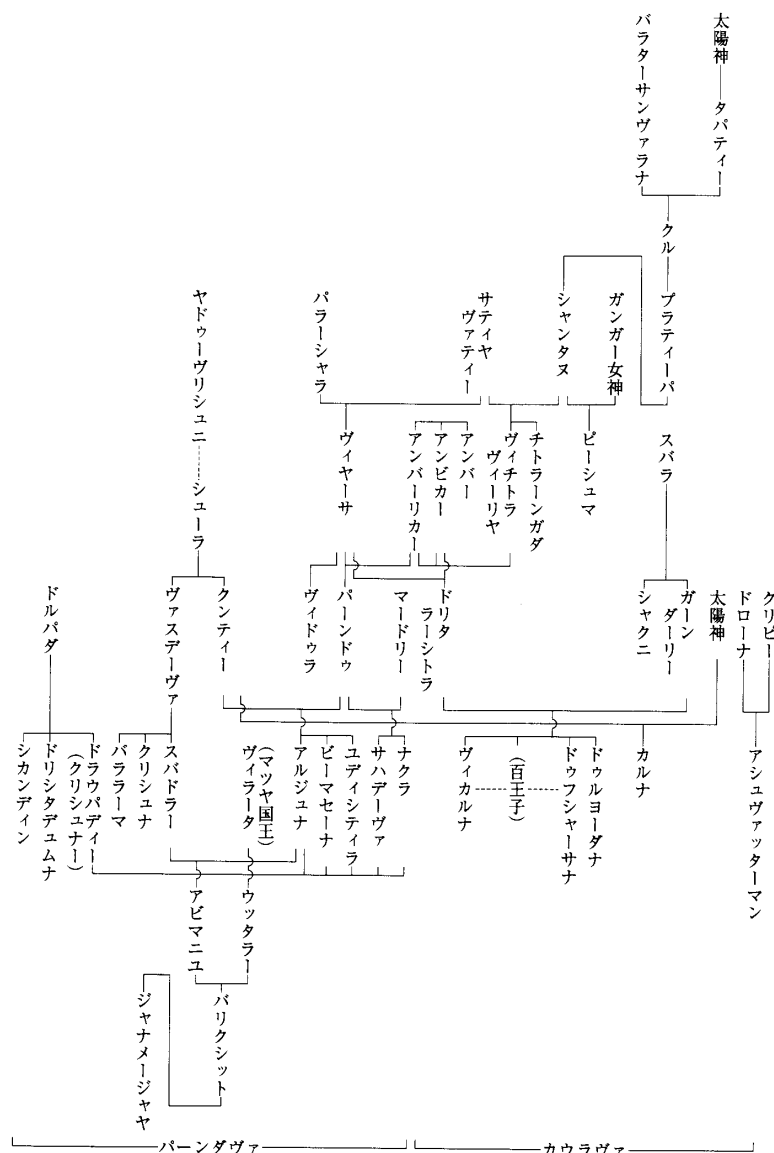
亡くなったパクリシットの息子ジャナメージャは王位に就くが、父の死んだ理由を大臣に問うのである。大臣は父パクリシットの業績<sup>ヴァルナ</sup>について次のように四種姓の繁栄に力を注いで、法を守ったことをつけ加えて告げた<sup>(88)</sup>。

「あなたの父君は徳性あり、偉大で、臣民を守る王であった。その偉大な王がどのように行動したか、それをお聞き下さい。

その法を知る王は、四姓（バラモン、クシャトリヤ、ヴァイシャ、シュードラ）よりなる社会を、各自その本務に従わせて、法にのっとりして守護し、あたかもダルマ神の化身のようであった。彼は栄光に満ち、比類なき勇武を持ち、大地の女神を守護した。彼を憎む者はなく、彼も何者をも憎まなかった。一切の生類に対して平等で、造物主<sup>ブラジャーパティ</sup>のようであった。バラモン（祭官、学者）、クシャトリヤ（王族、武士）、ヴァイシャ（実業者）、シュードラ（従僕）は満足して各自の仕事に従事し、王により見事に統治されていた」

パクリシット王の統治する王国は「四姓<sup>ヴァルナ</sup>よりなる社会」、つまり、有機体的社会構成として発達し、法<sup>ダルマ</sup>に基づく統治で栄えている。この「四姓<sup>ヴァルナ</sup>よりなる社会」の実利<sup>アルタ</sup>を担う「バラモン、クシャトリヤ、ヴァイシャ、シュードラは満足して各自の仕事に従事し」て王国の繁栄を導くのであった<sup>(89)</sup>。





注) 上村勝彦訳『マハーバーラタ』1, 37頁より作成

図3 バラタ族の家系図

(2) 『バガヴァッド・ギーター』と四種姓の社会

『マハーバーラタ』のバタラ族間の王位継承戦争前後における古代インドの王国が太初での宇宙創造主プルシャの体からできる四種姓ヴァルナの社会 (=有機体的社会構成) を伝統的に発達させてきたことは前に述べたところである。この『バガヴァッド・ギーター』のバタラ族社会も四種姓の社会を発展させ、新しい社会階層として登場する王族・戦士クシャトリア、実業者ヴァイシャ、そして、召使シュードラの業理論と輪廻の苦しみから救済する大衆宗教の勃興を不可避にする程度の危機に直面している。これまでは(-)バラモンの祭式至上主義、(二)王の法ダルマに基づく政戦略と実利アルテの追求とその保護、(三)サーンキヤの二元論に基づく無神論等に依拠して王国の繁栄を維持してきたが、王国の経済・社会基盤が農耕部族制から都市国家へ転換し、広域的一円支配の時代へと発達する。この都市国家と広域一円

領主制の発達にはバラモンから王族・戦士、実業者階層へその支配階層を変え、王族・戦士階層の台頭となり、これら知識人の求める大衆宗教を仏教、ジャイナ教の批判に答えるためにヒンドゥー教を大衆宗教として発達させることを緊急課題にさせていたのである。

『マハーバーラタ』でのクシャトリヤとデーヴァヤニとの結婚による種姓間の混合=混血、さらに、クシャトリヤ王とジャクンタラーとの種姓間混血が四種姓の社会、ひいては王国を衰退させる原因になる点については前に述べたところである。が、この『バガヴァッド・ギーター』でも同様に種姓間混血は婦女の墮落、一族の不徳、親族殺しによる罪悪等を浸透させることから、バタラ族もバタラ王国も滅びてしまうと戦士アルジュナを次のように苦しめ、迷わすのである<sup>(90)</sup>。

「ドリタラーシトラの息子たちとその縁者を殺すべきではない。実に、親族を殺して、どうして幸せになれよう。

貪欲に心乱された彼らが、一族を滅ぼす罪と、友を害する罪悪を、もし見ることがなくても。

一族を滅ぼす罪をよく知る我々が、この罪悪を回避する道を知らないでよいはずはない。

一族の滅亡において、永遠なる一族の<sup>ダルマ</sup>不徳(義務)は滅びる。美德が滅びる時、<sup>アダルマ</sup>不徳がすべての一族を支配する。

不徳の支配により、一族の婦女たちが墮落する。婦女たちが墮落すれば、<sup>ヴァルナ</sup>種姓の混乱が生ずる。

このような混乱は、一族の破壊者と一族とを地獄に導く。というのは、彼らの祖先は、団子と水の供養を受けられず、地獄に墮ちるから。

一族の破壊者の、種姓を混乱させるこれらの罪過により、永遠なる<sup>ジャーティ</sup>階級的美徳(義務)と一族の美德は破壊される。

一族の美德が滅びた人々は、必ずや地獄に住むと我らは聞いた」

ドリタラーシトラが王位をユディシティラに返還しないことから、バタラ族間戦争を引き起こすのであるが、しかし、アルジュナはこの親族間戦争に孕む親族殺しの<sup>ヴァルナ</sup>大罪と業理論での輪廻として地獄で再生する<sup>ジャーティ</sup>恐ろしさ、さらに、不徳→婦女の墮落→種姓の混血→階級及び一族の美德の破壊への連鎖の前に心を乱すのである<sup>(91)</sup>。

こうした親族間戦争を背景にするバタラ族の社会は<sup>ヴァルナ</sup>四種姓の実利と「<sup>ジャーティ</sup>階級的美徳」とを両輪にする有機体的社会構成を形成し、発達させるのである。『バガヴァッド・ギーター』の経済・社会基盤となる<sup>ヴァルナ</sup>四種姓の社会は各々の<sup>カースト</sup>生得職能(本務)に専心し、<sup>アルテ</sup>実利を追求することで「<sup>ジャーティ</sup>階級的美徳」(サブ・カースト)に帰結するが、各々の<sup>カースト</sup>生得職能の本務に専念する行為の<sup>ダルマ</sup>義務を<sup>ダルマ</sup>法とする業理論を不可避に伴なう。したがって、バタラ族の社会を繁栄に導くのは<sup>ヴァルナ</sup>四種姓の<sup>カースト</sup>生得職能=業を

本務として専念する業理論であるが、具体的には人間のプラクリティ（根本原質）の要素<sup>グーナ</sup>によって決定されるのである。が、人間はプラクリティ（根本原質）の要素<sup>グーナ</sup>に従って四種姓<sup>ヴァルナ</sup>の本務に専念することを法として義務づけられ、行為の成就を余儀なくされることから、業理論に忠実に従うことを不可避とする。『バガヴァッド・ギーター』でのバタラ族社会は四種姓<sup>ヴァルナ</sup>の本務に専念することを「階級<sup>ジャーティ</sup>の美德」とするのであり、業理論をそれぞれ四種姓<sup>ヴァルナ</sup>に属する人間のプラクリティ（本性）の義務<sup>ダルマ</sup>=法とするのである。親族間戦争の前に親族殺しの大罪を犯すのでないかと迷い、苦しむ戦士<sup>クシャトリア</sup>アルジュナに対してクリシュナは四種姓<sup>ヴァルナ</sup>の本務に専念し、「階級<sup>ジャーティ</sup>の美德」としてクシャトリアである戦士の義務を成就することを強く求め、さもなければ、軽蔑、罪悪、無能として非難されることになる<sup>(92)</sup>。

「聖バガヴァッドは告げた。――

あなたは嘆くべきでない人々について嘆く。しかも分別くさく語る。賢者は死者についても生者についても嘆かぬものだ。

私は決して存在しなかったことはない。あなたも、ここにいる王たちも……。また我々はすべて、これから先、存在しなくなることもない。

主体<sup>デーヒン</sup>（個我）はこの身体において、少年期、青年期、老年期を経る。そしてまた、他の身体を得る。賢者はここにおいて迷うことはない。

しかしクンティーの子よ、物質との接触は、寒暑、苦楽をもたらし、来たりては去り、無常である。それに耐えよ、アルジュナ……

あらゆる者の身体にあるこの主体（個我）は、常に殺されることがない。それ故、あなたは万物について嘆くべきではない。

更にまた、あなたは自己の義務<sup>ダルマ</sup>を考慮しても、戦慄<sup>おのの</sup>すべきではない。というのは、クシャトリア（王族、士族）にとって、義務に基づく戦いに勝るものは他にないから。

たまたま訪れた、開かれた天界の門である戦い。アルジュナよ、幸福なクシャトリアのみがそのような戦いを得る。

もしあなたが、この義務に基づく戦いを行わなければ、自己の義務と名誉を捨て、罪悪を得るであろう」

心を悲しませ、迷える戦士アルジュラを戦いに奮い立たせるクリシュナは前半で四種姓<sup>ヴァルナ</sup>の業=生得職務を本務として世俗的行為を行う人間の業理論に基づく輪廻をこの世の無常として受けいなければならないと告げ、後半で戦士の義務の遂行、つまり、戦うことを天界の門と見做すが、戦わなければ罪悪になると告げる。戦士クシャトリアの業（=人間のプラクリティの要素）で決定される行為は所有（身体）と経営（魂=主体（個我））とを分離することで清浄化され、生前解脱の境地に達するヨーガ（実践知）となる。ガンディーが『バガヴァッド・ギーター』を学習し、

真理探究(サティアグラハ)の実践知を体系化するために所有と経営とを分離するイギリス法の信託理論を適用することは既に前に述べたところである<sup>(93)</sup>。

『バガヴァッド・ギーター』でのテーマは四種姓<sup>ヴァルナ</sup>の社会<sup>アルテ</sup>の実利(世俗的行為)に基づく業理論と他方、輪廻と解脱との二者択一との両者の矛盾=対立を如何に統一して体系化するかにあるが、この両者の矛盾を解決する仲介としてM・ヴェーバの云う世俗内的無関心、ガンディーの主張する信託理論、さらに、『ギーター』のキー・ワードある「放擲」・「捨離」・「非所有」で解決することである。が、行為は身体(非有)と精神(個我・主体・実有)との統合を分離させる。つまり、アルジュナがクシャトリヤの義務に基づく戦いで貪欲なるドゥルヨーダナを討ち取って親族を殺しても、このアルジュナの業<sup>ヴァルナ</sup>=種姓の行為の成就是ドゥルヨーダナの身体=肉体を滅ぼしたにすぎず、ドゥルヨーダナの魂=精神を「他の新しい身体に行く」ことで「永遠」に常住することになるからである。だから、アルジュナのクシャトリヤとしての業<sup>ヴァルナ</sup>=種姓の行為は戦いを営なむ(経営)ことであるが、行為の果報(所有)を神に託ねて「非所有」となっているのでドゥルヨーダナの魂=精神を「殺さず、殺されもしない」ので、行為の果報に対して世俗的無関心、或いは放擲=捨離することで救い=生前解脱を達成するヨーガ(実践知)となる。こうした業に基づく定められた行為は所有と経営の合一(欲望、怒り、貪欲の不浄の輪廻)と、他方、所有と経営との分離で、業理論と輪廻の世界から解脱の救いという二面性を展開させる。『ギーター』ではこの行為の二面性のうち、所有と経営の分離を「要素と行為が[自己と]無関係であるという真理」によって表わされている。或いは行為の所有と経営の分離は「すべての行為を私のうちに放擲し<sup>ほうてき</sup>」と行為の果報を捨離することで非所有になる世俗的行為を意味する。つまり、ガンディーの主張する行為の果報を神に信託し非所有になることは行為の所有と経営の分離となるのである。かくて、バラタ族の社会は四種姓<sup>ヴァルナ</sup>のそれぞれの「自分の本<sup>ブラクリティ</sup>性<sup>アルテ</sup>にふさわしく行動する」業理論を実利にするが、業の決められた行為の中に一方で輪廻への道を、他方で解脱への道への二者択一を選択する二面性を内包するのである<sup>(94)</sup>。

『バガヴァッド・ギーター』では行為の二面性がM・ヴェーバーの言う世俗内行為と世俗的無関心として現われる。行為の果報を放擲する非所有、つまり、世俗内無関心は四種姓の社会が大いなる幻力で覆われているのを取り除き、平等に繁栄を享受する推進力となるのである。『バガヴァッド・ギーター』はバラタ族の四種姓<sup>ヴァルナ</sup>の業で決められた行為(職能の本務)を重要視し、人間の行為の果報を放擲する非所有を解脱の救いの道と見做す。が、行為のヨーガ(実践知)は四種姓<sup>ヴァルナ</sup>の本務として、或いは「階級<sup>ジャータイ</sup>の美德」と位置づけられ、行為の成就を義務づけるが、と同時に行為の非所有を解脱と見做すのであり、矛盾する弁証法の中に解決策を次のように見出すのである<sup>(95)</sup>。

「行為の成就を望む人々は、この世で神々を供養する。実に、人間界においては、行為(祭祀)から生ずる成就是速やかに実現する。

私は要素と行為を配分して、四種姓を創造した。私はその作者ではあるが、しかも行為しない不変のものであると知れ。

諸々の行為は私を汚すことはない。私には行為の結果に対する願望はない。このように私を理解する人は、諸行為により束縛されない。

解脱を求めた先人たちは、このように理解して行為をなした。それ故、かつて先人たちが行為したように、あなたも行為をせよ」

『バガヴァッド・ギーター』でのバタラ族の四種姓の社会は種姓每一階級別の職能の本務に専心する行為を祭式と見做し、さらに成就すること自体を法(=階級の美德)とし、つまり法の美德として位置づける。すなわち、「人間界においては、行為(祭式)から生じる成就是速やかに実現する」と、行為は祭式として聖化され、法となる。が、聖バガヴァッド=クリシュナが宇宙創造と共に人間社会を太初に創造する時、「私は要素と行為を配分して、四種姓を創造した」と告げるが、『マハーバーラタ』では宇宙巨人プルシャーが体の一部から四種姓の社会を造ったことは既に前述したところであり、四種姓の社会を太初から生み出され、インドの基層であると位置づける。この『バガヴァッド・ギーター』でも同様に四種姓の社会を創造するのは「私はその作者である」とするように、宇宙創造神の人格神となるクリシュナ(ヴィシュヌ神の化身)自身であると告白する<sup>(96)</sup>。

『バガヴァッド・ギーター』でのバラタ族の四種姓の社会ではそれぞれの種姓(職能)の本務を「階級」別に成就する行為を法(祭式)として聖化し、宗教上の天命(=召命)と見做している。さらに、この四種姓の社会を担う人間は有機体的一身分別の職能を生得=天命として成就することを美德とされているが、プラクリティ(根本原質)の要素によって決定される行為がそれぞれの階級別に相違する点について次のように特徴づけている<sup>(97)</sup>。

「地上においても天の神においても、プラクリティ(根本原質)より生じた三要素から解放された生類はいない。

バラモン、クシャトリヤ、ヴァイシャ、及びシュードラの行為は、(それぞれの)本性より生ずる要素に応じて配分されている。

寂滅、自制、苦行、清浄、廉直、理論知と実践知、信仰。以上は本性より生ずるバラモンの行為である。

勇猛、威光、堅固(沈着)、敏腕、戦闘において退かぬこと、布施、君主の資質。以上は本性より生ずるクシャトリヤの行為である。

農業と牧畜と商業は、本性より生ずるヴァイシャの行為である。シュードラの本性より生じた行為は、[他の種姓に]仕えることよりなる。

各自の行為にいそしむ人は成就を得る。自己の行為にいそしむ人が、どのようにして成就

を見出すか、それを聞くがよい。

彼から万物の活動があり、彼によってこの全世界が遍く満たされている者、彼を自己の行為により崇拜して、人は成就を見出す。

自己の義務の遂行は、不完全でも、よく遂行された他者の義務に勝る。本性により定められた行為をすれば、人は罪に至ることはない。

生まれつきの行為は、たとえ欠陥があっても、捨てるべきでない。アルジュナよ。実にすべての企ては欠陥に覆われているのだ。火が煙に覆われているように。

何ものにも執着しない知性を持ち、自己を克服し、願望を離れた人は、放擲により、行為の超越の、最高の成就に達する」

以上掲げた長文で前半部分では四種姓がその職能を本務として行為することで再生産される有機体的産業構成が形成される点を明らかにしている。つまり、四種姓の社会は(1)王族・戦士の政治業務、(2)バラモンの司祭業務、(3)ヴァイシャの産業業務、そして、(4)シュードラの奉仕・サービス業務等の有機体的産業構成で再生産される。したがって、四種姓は有機体的産業構成であると同時に、有機体的階級構成であり、これらの協業と分業を維持するため純血性と儀礼的制限で秩序づけられることを不可避とする。純血制と儀礼的制限が四種姓社会の産業構成と階級構成を支え、カースト的社会を形成することから、ガンディーが主張する第5のカーストである不可触民を第4のシュードラへ吸収し、統合することは四種姓の社会を支える不可触民制として編成替えするにすぎず、むしろ四種姓の社会を強化することに帰結する。アンベードカルはガンディーの不可触民制の解放を批判し、不可触民の解放にならず、むしろヒンドゥー教の強化になるだけであると批判するが、ガンディーの限界を突いている。後半では行為の成就でこの世=四種姓の社会が再生産され、協業と分業の円滑化で「遍く満たされ」て繁栄する点について描いている。すなわち、前半での四種姓の有機体的一身分別の行為について見てみると、(一)バラモンの本性に決定づけられる行為は「寂滅、自制、苦行、清浄、忍耐、廉直、理論知と実践知、信仰」を成就することである。(二)戦士・王族のクシャトリアの本性に決定づけられる行為は「勇猛、威光、堅固、敏腕、戦闘、布施、君主の資質」を発揮し、成就することである。(三)農業、牧畜、商業等に従事する実業人の本性に基づく行為は実利を成就するものである。そして、(四)召使、奴隷、使用人等のシュードラの本性より生じる行為は(他の種姓)に仕えることよりなる」のである<sup>(98)</sup>。

後半の行為の成就是四種姓の社会を遍く満たして繁栄を持たすが、行為の所有と経営を分離し、行為の果報を神に託す知性、自己克服、非所有への放擲を「最高の成就」とするのである。

## (二)解脱への4つの道

『バガヴァッド・ギーター』でのバラタ族の四種姓の社会は有機体的一身分別生得職能の本性に基づく行為の成就で実利を達成し、繁栄する古代インド社会である。しかし、四種姓の社会で

の天命に定められた行為の二面性は(一)所有と経営とを合一する場合、行為の果報に執着する欲望、怒り、貪欲で地獄へ落ちる輪廻の因果応報機構を再生することとなり、他方の(二)所有と経営とを分離する場合、4つの道=ヨーガにより生前解脱、或いは臨終解脱で輪廻を立ち切ることとなり、これら両者の二者択一を行為する人間に選択させるのである。

### (1)カルマの道

が、最高神の人格神であるヴィシュヌークリシュナ神は四種姓の社会での人間が行為への執着で悪人となって地獄へ落ち、衰退する場合、この世に出現し、浄化の4つの道=ヨーガを通して四種姓の社会を救い、善人にして行為の成就で繁栄へ導くことを使命にするものであると次のように告げる<sup>(99)</sup>。

「私は不生であり、その本性は不変、万物の主であるが、自己のプラクリティ（根本原質）に依存して、自己の幻力により出現する。

実に、美德（正法）が衰え、不徳（非法）が栄える時、私は自身を現わすのである。

善人を救うため、悪人を滅ぼすため、美德を確立するために、私は世紀ごとに出現する。

私の神的な出生と行為を、このように如実に知る者は、身体を捨てた後、再生することなく、私のもとに来る。

愛執、恐怖、怒りを離れ、私に専念し、私に帰依する多くの者は、知識という苦行（熱力）によって浄化され、私の状態に達する。

人々がいかなる方法で私に帰依しても、私はそれに応じて彼らを愛する。人々はすべて私の道に従う」

この引用文から窺えるように、『バガヴァッド・ギーター』は四種姓の社会の衰退と地獄へ落ちる苦しみの中から「善人を救うため、悪徳を滅ぼすため、美德を確立するために」ヴィシュヌークリシュナ神をこの世に出現させ、4つの道（=ヨーガ）である「私の道に従う」ことを四種姓の人々に求める<sup>(100)</sup>。

四種姓の社会で行為の果報に対する「愛執、恐怖、怒りを離れ、私に専念し、私に帰依する多くの者」は既に行為の所有と経営を分離し、果報を神に託す知識を体得しているので「知識という苦行（熱力）によって浄化され、私の状態に達する」生前解脱によって救われる。『バガヴァッド・ギーター』でのこうした四種姓の社会を清浄化（聖化）するのは有機体的・身分別の職能義務に励むカルマの道（=ヨーガ）における実践知を修得することによってである。四種姓の社会は行為の義務を励むカルマの道を解脱への第1位に位置づける。それゆえ、例えば、戦士アルジュナの場合、親族殺しへの罪から戦うことを迷うが、その迷いからの救いは戦士として戦かう職能義務の成就で清浄化（聖化）されなければならないとクリシュナ=聖バガヴァッドは次のように告げる<sup>(101)</sup>。

「あなたが我執により、「私は戦わない」と考えても、あなたのその決意は空しい。[武人の]本性があなたを駆り立てるであろう。

アルジュナよ、あなたは本性から生ずる自己の行為に縛られている。あなたが迷妄の故に、その行為を行おうと望まないでも、否応なくそれを行うであろう。

主は万物の心の中にある。その<sup>マヤ</sup>幻力により万物を、からくりに乗せられたもののよう<sup>マヤ</sup>に回転させつつ。

全身全霊で彼のみ庇護を求めよ。アルジュナよ。彼の<sup>おんちよう</sup>恩寵により、あなたは最高の寂靜、永遠の境地に達するであろう。

以上、私は秘中の秘である知識をあなたに説いた。これを残らず熟慮してから、あなたの望むままに行え」

『バガヴァッド・ギーター』第18章の終りで「秘中の秘である知識を」クリシュナがアルジュナに説いたのは行為の成就に励むカルマの道を救いの第1位として見做したことである。アルジュナが「私は戦わない」と考えても、クリシュナは<sup>ブラフマン</sup>最高神としてアルジュナの<sup>アートマン</sup>心の中に入り込み、<sup>マヤ</sup>幻力によりアルジュナの本性プラクリティを「回転させつつ」、「否応なくそれを行う」、或いは「[武人の]本性があなたを駆り立てる」ようにするのである。さもなければ、戦士としての職能義務を遂げない場合は不徳の罪で地獄の胎に投げ込まれて輪廻の再生を受けることになる<sup>(102)</sup>。

ちなみに、『バガヴァッド・ギーター』ではカルマの道となる16点を挙げれば次の諸点となる。

(1) カルマの道(行為の義務に励む)

- (一)クシャトリヤにとって、義務に基づく戦いに勝るものはない(2-31)
- (二)この義務に基づく戦いを行わなければ、自己の義務と名誉とを捨て、罪悪を得るであろう(2-33)
- (三)あなたは殺されれば天界を得、勝利すれば地上を享受するであろう(2-37)
- (四)苦楽、得失、勝敗を平等(同一)のものとして見て、戦いに専心せよ。そうすれば罪悪を得ることはない(2-38)
- (五)あなたの職務は行為そのものである。決してその結果にはない。行為の結果を動機としてはいけない(2-47)
- (六)すべての人は、プラクリティ(根本原質)から生ずる<sup>グナ</sup>要素により、否応なく行為させられる(3-5)
- (七)思考器官により感官を制御し、執着なく、運動器官により行為のヨーガを企てる人、彼はより優れている(3-7)
- (八)この世の人々は行為に束縛されている。執着を離れて、その(祭祀の)ための行為をなせ(3-9)
- (九)行為はブラフマンから生ずると知れ。ブラフマンは不滅の存在から生ずる。それ故、遍在するブラフマンは常に祭祀において確立する(3-15)
- (十)実に、執着なしに行為を行えば、人は最高の存在に達する(3-19)
- (十一)行為の中に無為を見、無為の中に行為を見る人。彼は人間のうちの知者であり、専心してすべての行為をなす者である(4-18)
- (十二)彼の企てがすべて欲望と意図(願望)を離れ、彼の行為が知識の火により焼かれているなら、知者たちは彼を賢者と呼ぶ(4-19)
- (十三)行為の結果への執着を捨て、常に充足し、他に頼らぬ人は、たとえ行為に従事していても、何も行為をしていない(4-20)



(四)願望なく、心身を制御し、すべての所有を捨てた人は、ただ身体的行為をなしつつ、罪にいたることはない(4-21)

(五)たまたま得たものに満足し、相対的なものを超え、妬み(不満)を離れ、成功と不成功を平等(同一)に見る人は、行為しても束縛されない(4-22)

(六)行為から生ずるものであると知れ。そう知れば、あなたは解脱するであろう(4-32)

## (2)サンニャーサの道

『バガヴァッド・ギーター』が太初からインド社会を四種姓の社会と見做し、その発達を種姓の職能義務の成就に求め、カルマの道に救いを見出すことは前に述べたところである。が、このカルマの道は業理論と輪廻を生み出す行為の果報に執着し、その結果、欲望、怒り、貪欲の3種の地獄=暗黒の門へ陥いる崩壊への道を一面で含意する<sup>(103)</sup>。

こうしたカルマの道は行為の果報に我執する結果、所有と経営の合一を通じてこの世が阿修羅、夜叉そして羅刹の人々、悪人の不浄、悪の巣窟と化し、「幾百の希望の罫に縛られ、欲望と怒りに没頭し、欲望を享受するために、不正な手段によって富を蓄積しようと望む」ことに帰趨する。カルマの道は行為の我執によって所有と経営を合一することから、「教典の教令を無視し、欲望のままに生活する」阿修羅な人々へ変えるこの世の行為になる一面を内包するのである。

だが、カルマの道はもう一面としてサンニャーサの道(=ヨーガ)への実践知、つまり、行為の果報に対する所有と経営を分離し、果報を神に託す非所有への実践知を含意するのである。カルマの道の二面的側面のうち行為の果報を神に託す、つまり投擲(サンニャーサ)することをイギリスの法理論の信託理論に見出し、『バガヴァッド・ギーター』をサティヤグラハの聖典として見做すのがガンディーであることは既に前に述べたところである。

上村勝彦はこのサンニャーサの道を解脱への第4の道として位置づけ、従来の3つの道に付け加えることで『バガヴァッド・ギーター』、さらに、ヒンドゥー教の聖典を再解釈することを問題提起する。『バガヴァッド・ギーター』はカルマの道に孕む行為の罪=業理論と輪廻を立ち切るラディカルな実践知として無償の行為=投擲 Sannyasa を清浄の手段と捕え、解脱への道=ヨーガの一つに加える<sup>(104)</sup>。

が、『バガヴァッド・ギーター』では(一)行為のヨーガ、(二)知識、(三)行為の投擲を関連づけて使用し、単独の使用を避ける相対的用語の使用に注意すべきである。行為の投擲が最初に使用されるのは『バガヴァッド・ギーター』の第4章である。この4章でもこれら3つの言葉が相互に関連されながら解脱への道(=境地)に到達するキー・ワードとして次のように使用される<sup>(105)</sup>。

「あたかも燃火が薪を灰にするように、知識の火はすべての行為(業)を灰にするのである。

というのは知識に等しい浄化具はこの世にないから。[行為の]ヨーガにより成就した人は、やがて自ら、自己のうちにそれ(知識)を見出す。

信頼を抱き、それに専念し、感官を制御する者は知識を得る。知識を得て、速やかに最高の寂靜に達する。

知識なく、信賴せず、疑心ある者は滅びる。疑心ある人には、この世界も、他の世界も、また幸福もない。

[行為の]ヨーガにより行為を放擲<sup>ほうてき</sup>し、知識により疑惑を断ち、自己を制御した人を諸行為は束縛しない。

それ故、知識の剣により、無知から生じた、自己の心にある疑惑を断ち、[行為の]ヨーガに依拠せよ。立ち上れ、アルシュナ」

3つの言葉(Ⅰ行為、Ⅱ知、Ⅲ投擲)が関連と補完しあつて解脱となるが、具体的に(Ⅰ)行為の果報は神に託される無償の心(自己制御=知識、知性の火、剣)を知と見なし、最初から否定される、が、(Ⅱ)行為のヨーガ(業)の罪は知識の火(無償の心)によって燃え上つて、(Ⅲ)灰になる、つまり、行為の投擲に帰結して、(Ⅳ)最高の寂靜(解脱)に達する<sup>(106)</sup>。

こうした3つの言葉の重ね合わせとその関連を踏まえて使用することで、行為の投擲は相対的に位置づけられて宗教的解釈を行われるのである。したがって、これらの3つの言葉の関連性を踏まえ、より発展した形で行為の投擲を明確化するのが第5章であり、アルジュナの次の問いとそれに対するクリシュナ=聖バガヴァッドの答えの中に示される<sup>(107)</sup>。

「アルジュナはたずねた。

「クリシュナよ、あなたは行為の放擲<sup>ほうてき</sup>を讃え、かつ行為のヨーガを讃える。この両者のうちでどちらが優れているか、はっきりと私に語って下さい。

聖バガヴァッドは告げた。――

行為の放擲と行為のヨーガとは、共に至福をもたらす。しかし、その両者のうちで、行為のヨーガは行為の投擲より優れている。

憎むことなく、期待することない人は、常に放擲した者と知らるべきである。実に、相対を離れた人は、容易に束縛から解放される。

この問答に現われているように、行為のヨーガが行為の放擲より優れていると見做されているが、行為のヨーガに既に果報を神に託す否定の知識を込められることになるという前提が成り立つ場合である。さもなければ行為のヨーガは業理論によって我執から貪欲な阿修羅<sup>アスラ</sup>の罪深い親族殺し、種姓間混血、蓄財、暴力、不浄の地獄、自惚れ、激情、怠惰、不法、不徳、犯罪、悪等を汜濫させる業理論と輪廻を再生する原因と結果の応報機構と化す。こうした行為の放擲は否定の知識を仲介することで行為のヨーガを解脱=清浄へ尊くことになるが、このことはM・ヴェーバーの云う世俗的無関心を伴なう<sup>(108)</sup>。

『バガヴァッド・ギーター』での四種姓<sup>ヴァルナ</sup>の社会は行為のヨーガに否定の知識を介することで行為

の放擲によって清浄化され、或いは聖化されることで実利<sup>アルテ</sup>の繁栄を享受する。それゆえ行為の放擲<sup>サンニヤーサ</sup>は行為の破棄でなく、仲介する否定の知識を含意する行為の捨離<sup>ティヤーガ</sup>又は離欲として把握される。が、行為の放擲<sup>サンニヤーサ</sup>と捨離<sup>ティヤーガ</sup>とが同義語として見做されるのは否定の知識を介するためであり、『バガヴァッド・ギーター』の最終章である第18章でのアルジュナの問いに対するクリシュナ=聖バガヴァッドの答えの中で次のように語られる<sup>(109)</sup>。

「アルジュナはたずねた。

「クリシュナよ、私は放擲<sup>サンニヤーサ</sup>と捨離<sup>ティヤーガ</sup>との真実を、それぞれ知りたいと思う。

聖バガヴァッドは告げた。――

……アルジュナよ、その捨離（放擲）に関する私の結論を聞け。実に捨離は〔要素<sup>グーナ</sup>に応じて〕三種であると説かれる。

祭祀と布施と苦行の行為は捨てるべきではない。それは行われるべきである。賢者たちにとって、祭祀と布施と苦行は浄化するものである。

しかし、それらの行為は、執着と結果とを捨てて行われるべきである。アルジュナよ、これが私の最高の結論である。

一方、定められた行為の放擲はよろしくない。迷妄によってそれを捨てることは、暗質<sup>タマス</sup>的な捨離であると称される。

ただ苦しいからと言って、身体的苦痛を恐れて行為を捨てる場合、その人は激質<sup>ラジャス</sup>的な捨離をなすもので、捨離の果報を得ないであろう。

アルジュナよ、なすべきであると考えて、定められた行為を、執着と結果とを捨てて行う場合、それは純質<sup>サットヴァ</sup>的な捨離であると考えられる」

この長文で強調されている行為の投擲は否定の知識を介することで行為のヨーガを清浄化するために「執着と結果とを捨てる」捨離と同義化されるのである。

が、この長文の後半では行為の放擲=捨離を人間のプラクリティ（根本原質）の要素によって3種類に分類される。

第一の暗質的な捨離は迷妄によって定められた行為を破棄することである。

第二は激質的な捨離で、身体的苦痛で行為を捨てることである。

第三は純質的な捨離で、「定められた行為を、執着と結果とを捨てて行う場合」である<sup>(110)</sup>。

かくて、行為の放擲=捨離は行為の所有と経営を分離し、果報=行為の結果を捨てる知識を有することを前提にしてなされる実践知である。そのため、この行為の放擲=捨離を行う人は捨離者と見做され、解脱への第二の道=ヨーガに到達する。つまり、「実に身体を持つ者は、行為を残らず捨てることはできない。だが、行為の結果を捨てた人は、捨離者と呼ばれる」と、行為の超越が行為の投擲=捨離の現われとなる。

ちなみに、行為の放擲=捨離の道=ヨーガは『バガヴァッド・ギーター』で次の10点に纏められる。

(2) サンニャーサへの道(行為の果報を投擲する)

- (一)すべての行為を私のうちに放擲し、自己に関することを考察して、願望なく、「私のもの」という思いなく、苦熱を離れて戦え(3-30)
- (二)[行為の]ヨーガにより行為を放擲し、知識により疑惑を断ち、自己を制御した人を、諸行為は束縛しない(4-41)
- (三)行為の結果にこだわらず、なすべき行為をする人は、放擲者でありヨーギンである(6-1)
- (四)放擲と言われるもの、それはヨーガを知れ。というのは、意図(願望)を放擲しないヨーギンは誰もいないから(6-2)
- (五)実に、感官の対象と行為とに執着せず、すべての意図を放擲した人は、ヨーガに登った人と言われる(6-4)
- (六)ヨーギンは苦行者よりも優れ、知識人よりも優れていると考えられる。またヨーギンは祭式を行う者よりも優れている(6-46)
- (七)善悪の果報をもたらす行為(業)の束縛から解放されるであろう。放擲のヨーガに専心し、解脱して私に至るであろう(9-28)
- (八)すべての行為を私のうちに放擲し、私に専念して、ひたむきなヨーガによって私を瞑想し、念想する人々(12-6)、それら私に心を注ぐ人々にとって、私は遠からず生死流転の海から彼らを救済する者となる(12-7)。
- (九)知識は常修より優れ、瞑想(禅定)は知識より優れ、行為の結果の捨離は瞑想より優れている。捨離により直ちに寂静がある(12-12)
- (十)実に身体を持つ者は、行為を残らず捨てることはできない。だが、行為の結果を捨てた人は、捨離者と呼ばれる(18-11)

(3)ジニャーナの道

ジニャーナ、つまり、知識は理論知(知識のヨーガ)と実践知(行為のヨーガ)をメダルの表と裏のようにして成り立つが、両者を統合することで行為のヨーガを行為の放擲=捨離へ帰趨(解脱)する第一の役割と、さらに信仰へ導く知識の第二の役割という二面性を有する。

第一の役割である知識の火は行為(業)の罪を焼き、果報を神に託す知識によって灰にして清浄(=非所有)にする。生前解脱が行為のヨーガを否定の知識を込められて行うことで行為の放擲=捨離を伴うのであるが、この行為の放擲に対する果報は放擲者=捨離者の自己をヨーギンとしてブラフマン(最高神=梵)へ同化する「ブラフマン(梵)の境地」に達する(梵我一如)のである。さらに、臨終の時は行為のヨーガを否定の知識を込めて成就するなら行為の放擲=捨離となり、身体を離れた魂=個我を「ブラフマンにおける涅槃に達する」こととなるのである<sup>(111)</sup>。

ジニャーナの道は無知に対する否定の知識として相対化されて浄化具になるが、行為の二面性に対する知識の二面性として現われ、『バガヴァッド・ギーター』の第18章で「知識の最高の帰結」について次のようにクリシュナによって告げられる<sup>(112)</sup>。

「成就に達した者が、どのようにしてブラフマンに達するか、私はそれをごく簡潔に説くから聞け。アルジュナ。これが知識の最高の帰結である。

清浄な知性をそなえ、堅固さにより自己<sup>アートマン</sup>を制御し、音声などの感官の対象を捨て、また愛情を捨て、

人里離れた場所に住み、節食し、言葉と身体と意<sup>こころ</sup>を制御し、常に瞑想のヨーガに専念し、離欲を抛り所にし、

我執、暴力、尊大さ、欲望、怒り、所有を捨て、「私のもの」という思いなく、寂靜に達した人は、ブラフマンと一体化することができる」

この前半の部分は『マハーバーラタ』で、さらに『バガヴァッド・ギーター』で、特にヒンドゥー教徒の守るべき義務としての四種姓<sup>ヴァルナ</sup>の職能義務と並ぶ四住期（学生期、家長期、林住期、遊行期）を通して理想的生涯<sup>ダルマ</sup>の法の到達点を「知識の最高の帰結」に求めるのである<sup>(113)</sup>。

特に、四種姓の社会での理想的生涯は四住期<sup>ダルマ</sup>の法を守る知識を解脱の浄化具とし、最高神の人格神であるヴィシュヌ・クリシュナと合一する信愛<sup>バクティ</sup>の知性＝知識を信仰にまで高めることである。ここに『ギーター』は不二一元論の有神論として信愛<sup>バクティ</sup>を重視し、梵我一如に基づく人格神との一体化を信仰知として体系化するのである。それゆえ、第二の知識が信仰知へ高められ、ヒンドゥー教の核心となるに至る点は後半の部分となり、クリシュナによって引き続き次のように告げられる<sup>(114)</sup>。

「ブラフマンと一体になり、その自己<sup>アートマン</sup>が平安になった人は、悲しまず、期待することもない。彼は万物に対して平等であり、私への最高<sup>バクティ</sup>の信愛を得る」

ちなみに、『バガヴァッド・ギーター』でのジニャーナの道は次の16点にわたって述べられている。

### (3) ジニャーナの道 (知識に励む)

- (一) 知性をそなえれば、あなたは行為の束縛を離れるであろう (2-39)
- (二) この教法のごくわずかでも、大なる恐怖 (輪廻) から人を救済する (2-40)
- (三) この世では、決定を性とする知性は唯一である (2-41)
- (四) 実に、(一般の) 行為は、知性のヨーガよりも遥かに劣る。知性に抛り所を求めよ (2-49)
- (五) 知性をそなえた賢者らは、行為から生ずる結果を捨て、生の束縛から解脱し、患いのない境地に達する (2-51)
- (六) 知性が、揺ぎなく確立し、三昧において不動になる時、あなたはヨーガに達するであろう (2-53)
- (七) 知識の祭祀は財物よりなる祭祀よりも優れている。すべての行為は残らず知識において完結する (4-33)
- (八) それを (師への) 服従により、質問により、奉仕により知れ。真理を見る知者たちは、あなたに知識を教示するであろう (4-34)
- (九) それを知れば、あなたは再び迷妄に陥ることはなからう。アルジュナよ。それによりあなたは万物を残らず、自己のうちに、また私のうちに見るであろう (4-35)
- (十) あたかも燃火が薪を灰にするように、知識の火はすべての行為 (業) を灰にするのである (4-37)
- (十一) 知識に等しい浄化具はこの世にないから。[行為の] ヨーガにより成就した人は、やがて自ら、自己のうちにそれ (知識) を見出す (4-38)

(㊦)信頼を抱き、それに専念し、感官を制御する者は知識を得る。知識を得て、速やかに最高の寂靜に達する(4-39)

(㊦)知識の剣より、無知から生じた、自己の心にある疑惑を断ち、[行為の] ヨーガに依拠せよ(4-42)

(㊦)私にのみ意を置け。私に知性を集中せよ。その後、あなたはまさに私の中に住むであろう。疑問の予知はない(12-8)

(㊦)常に自己<sup>アルトマン</sup>に関する知識に専念すること。真知の目的を考察すること。以上が「知識」であると言われる。それと反対のことは無知である(13-2)

(㊦)それ(ブラフマン)は諸々の光明のうちの光明であり、暗黒の彼方にあると言われる。それは知識(真知)であり、知識の対象であり、知識により到達されるべきものである。それはすべてのものの心に存在する(13-17)

#### (4)バクティの道

否定の知識が信愛<sup>バクティ</sup>へ高められると、人格神への信仰に発達=展開することは前述したところである。ウパニシャッド哲学が否定の知識とヨーガ(瞑想)とに基づいて梵我一如説を体系化したことは前に触れたところであるが、無神論を内包することになる。が、この『バガヴァッド・ギーター』はこうした第二期のウパニシャッド哲学の梵我一如説と無神論、さらに、第三期の六派哲学の、とりわけヴェーダーンタ哲学の不二一元論と無神論とを批判的に発展し、有神論(ヒンドゥー教の人格神信仰)と解脱への4つの道を体系的に提示することでヒンドゥー教の聖典と見做されることになる。

それゆえ、バクティの道は(-)信愛と(二)恩寵<sup>おんちよう</sup>との二面性を通してヒンドゥー教信仰を確立することを狙いとし、第四期としての『バガヴァッド・ギーター』を特徴づける<sup>(115)</sup>。

バクティの道の二面性のうち、(-)の信愛<sup>バクティ</sup>については否定の知識との関連で前述したが、同時に(二)恩寵<sup>ブラサーダ</sup>と重ね合わされて解説に達する宗教的信仰として現われることについては『バガヴァッド・ギーター』最終章(第18章)で後半の部分として引き続き、クリシュナによって次のように告げられる<sup>(116)</sup>。

「信愛により彼は真に私を知る。私がいかに広大であるか、私が何者であるかを。かくて真に私を知って、その直後に彼は私に入る。

私に帰依する人は、常に一切の行為をなしつつも、私の恩寵により、永遠で不変の境地に達する。

心によりすべての行為を私のうちに放擲し、私に専念して、知性<sup>ブッティ</sup>のヨーガに依存し、常に私に心を向ける者であれ。

私に心に向けていれば、私の恩寵により、すべての苦難を越えるであろう。もし我執により、[私の教えを]聞かないならば、あなたは滅亡するであろう」

この長文は前半で(-)信愛を、後半で(二)恩寵<sup>ブラサーダ</sup>により、私(人格神のヴィシュヌークリシュナ神)に向けて帰依する信仰心を燃え上がらせることをバクティの道(=ヨーガ)であるとする。

とりわけ、人格神に保護を求め、それに答えて救いを与える恩寵<sup>ブラサーダ</sup>はこの『バガヴァッド・ギー

ター』のテーマの一つとなり、ヒンドゥー教を成立させる根本原理となっている。自然神から宇宙創造主、さらに人格神への信仰の発達第一期のバラモン教から第二期のウパニシャッド哲学、さらに、第三期の六派哲学を経てヒンドゥー教への発達史となる。『バガヴァッド・ギーター』では人格神が成立し、この人格神が恩寵<sup>ブラサード</sup>を与えることは行為のヨーガで所有と経営とを結びつけて成果に我執する阿修羅<sup>アスラ</sup>、暗質或いは激質な人、捨離しない人、悪人、無知な人、小知の人々、愚者、疑心ある者、専心しない人、享楽の人々等をも救うことでヒンドゥー教が大衆宗教となることを意味する<sup>(117)</sup>。

行為のヨーガに執着するこれら極悪人を保護し、さらに恩寵<sup>ブラサード</sup>して救う(=解脱)ことができるのは最高神である人格神へ同一化し、専念する個我<sup>アートマン</sup>の信仰知を通してであり、或いは、悪人的なものを神的なものへ信愛<sup>バクティ</sup>を通して変容することによってであり、人格神の恩寵を次のように展開する<sup>(118)</sup>。

「私は万物に対して平等である。私には憎むものも好きなものもない。しかし、信愛をこめて私を愛する人々は私のうちにあり、私もまた彼らのうちにある。

たとえ極悪人であっても、ひたすら私を信愛するならば、彼はまさしく善人であるとみなさるべきである。彼は正しく決意した人であるから。

速やかに彼は敬虔な人となり、永遠の寂靜に達する。アルジュナよ、確信せよ。私の信者は滅びることがない。

実に、私に帰依すれば、生れの悪い者でも、婦人でも、ヴァイシャ(実業者)でも、シュードラ(従僕)でも、最高の帰趨に達する。

いわんや福德あるバラモンたちや、王仙である信者たちはなおさらである。この無常で不幸な世に生まれたから、私のみを信愛せよ。

私に意<sup>こころ</sup>を向け、私を信愛せよ。私を供養し、私を礼拝せよ。このように私に専念し、[私に]専心すれば、あなたはまさに私に至るであろう」

「私は万物に対して平等である」というヒンドゥー教の人格神とその多神化の宗教的立場はイスラーム教、或いはキリスト教の唯一絶対神という非対称的立場に対して相対的対称性を現わす。かくて、「万物に対して平等である」相対主義に立つことは善と悪、貧と富、成功と不成功、行為と無為、味方と敵、尊敬と軽蔑、石と黄金、非難と称讃との相対性を同一視することを意味する。かくて、この相対性の同一と平等は極悪人と善人を同一化し、平等に解脱へ導くことができ、信愛又は恩寵を経て聖化することを可能にするのである。相対性を平等化することは信愛に対して恩寵を賦与することとなり、信仰意識を形成する<sup>(119)</sup>。

が、ヒンドゥー教の人格神が四種姓<sup>ヴァルナ</sup>の社会の有機体的社会構成に対応する有機体的宗教神としての多様性を有することを特徴とするが、こうした人格神の多様性はヴィシュヌ神、インドラ

神,そしてシヴァ神の三位一体として現われることになる。アルジュナがクリシュナに自己のヨーガと示現とを語って欲しいと問いかけるが、この問いに対してクリシュナは示現の多様性の若干の例を次に告げる<sup>(120)</sup>。

「私はアーディティヤ神群におけるヴィシュヌである。光明における輝く太陽である。私はマルト神群におけるマリーチである。星宿における月である。

私は諸ヴェーダにおけるサーマ・ヴェーダである。神々におけるヴァーサヴァ（インドラ）である。私は諸感官における<sup>マナス</sup>意（思考器官）である。万物（生類）における知力である。私はルドラ神群におけるシャンカラ（シヴァ）である。」

クリシュナはヴィシュヌ神の化身である。が、右の文章においてクリシュナは示現の多様性としてアーディティヤ神群のヴィシュヌ、神々の王インドラ、そして、ルドラ神群のシヴァの三位一体を現わし、ヒンドゥー教の有機体的宗教を特徴づけ、信愛と恩寵の至高性のプルシャ（宇宙的根源）となっている<sup>(121)</sup>。

こうしてクリシュナが示現の多様性を語って、「<sup>アトマン</sup>自己に関すること」の最高の秘密を告げるのを受け、さらに、アルジュナはクリシュナの姿を見せて欲しいと願う。クリシュナはその姿の神秘主義と恐ろしい至高のプルシャを見せる。アルジュナはクリシュナの宇宙の神秘主義と「全世界を遍く呑み込みつつ、燃え上る口で舐めつくす、あなたの恐ろしい光」に恐怖で<sup>おのの</sup>戦慄くのであり、以前の人間の姿である人格神に戻って欲しいと懇願する。これに答えてクリシュナは恐ろしい姿から以前の人格神に戻ることを次のように告げる<sup>(122)</sup>。

「聖バガヴァッドは告げた――

アルジュナよ、私はあなたに恩寵を与えようとして、自己のヨーガにより、この最高の姿を示したのだ。威光（光輝）よりなり、一切、無限、本初であり、あなた以外にはかつて見られたことがない私の姿を。

ヴェーダ、祭祀、学習によっても、布施によっても、儀式によっても、激しい苦行によっても、人間界において、あなた以外には、このような姿の私を見るができない。

私のこのような恐ろしい姿を見ても、戦慄いてはいけない。心を乱してはいけない。恐怖を離れ、心から喜んで、あなたは再び前と同じ私の姿を見るがよい。

サンジャマは語った。――

ヴァースデーヴァは、アルジュナにこのように告げると、再び自分の[人間の]姿を示した。偉大な人は再び温和な姿になって、恐れたアルジュナを元気づけた。

アルジュナは言った。

「クリシュナよ、あなたの人間としての温和の姿を見て、今や私は平静になり、平常の状態



にもどった。

聖バガヴァッドは告げた……

しかし、ひたむきな信愛により、このように私を真に知り、見て、私に入ることができる。アルジュナよ。

私の為の行為をし、私に専念し、私を信愛し、執着を離れ、すべてのものに対して敵意ない人は、まさに私に至る。アルジュナよ」

この長文は前半でクリシュナが恩寵を与えて恐ろしい光(=姿)を見せ、再び温和な人間の姿に戻って人格神になったこと、後半でひたむきな信愛と行為の放擲によって私(クリシュナ)を見、私に入って、私に至る解脱としてのバクティの道をさし示すのである<sup>(123)</sup>。

人間の姿を取った人格神がヒンドゥー教の有機体的宗教の象徴となったことはバクティの道、つまり、信愛と恩寵を与え、信仰意識の対象となり、ヒンドゥー教を大衆宗教へ発展させる要因の一つとなるのである。

ちなみに、『バガヴァッド・ギーター』でのバクティの道は次の12点に要約される。

#### (4) バクティの道(神の恩寵を請う)

- (一) 一体観(平等の同一)に立って、万物に存する私を信愛する者、そのヨーギンは、いかなる状態にあろうとも、私のうちにある(6-31)
- (二) 臨終の時、私のみを念じて肉体を脱して逝く者は、私の状態に達する(8-5)
- (三) 常修のヨーガに専心し、他に向わぬ心によって念じつつ、人は神聖なる最高のプルシャに達する(8-8)
- (四) その非顕現の存在は不滅と言われる。最高の帰趨と言われる。人々はそれに達すれば、回帰することはない。それは私の最古の住処がある(8-21)。それは最高のプルシャである。しかしそれはひたむきな信愛により得られる。万物はその中にあり、この全世界はそれにより遍く満たされている(8-22)
- (五) 偉大な人々は神的な本性に依存し、私を不変なる万物の本初であると知って、一心に私を信愛する(9-13)。彼らは常に私を讃美し、強個な信念をもって努力し、信愛によって私を礼拝し、常に私を専心して、私を念想する(9-14)
- (六) 人が信愛をこめて私に葉、花、果実、水を供えるなら、その敬虔な人から、信愛を持って捧げられたものを私は受ける(9-26)
- (七) 私は万物に対して平等である。私には憎むものも好きなものもない。しかし、信愛をこめて私を愛する人々は私のうちにあり、私もまた彼らのうちにある(9-29)。たとえ極悪人であっても、ひたすら私を信愛するならば、彼はまさしく善人であるとみなさるべきである。彼は正しく決意した人であるから(9-30)
- (八) 私に意を向け、私を信愛せよ。私を供養し、私を礼拝せよ。このように私を専念し、[私に]専心すれば、あなたはまさに私に至るであろう(9-34)
- (九) 私は一切の本源である。一切は私から展開する。そう考えて、知者たちは愛情をこめて私を信愛するのである(10-8)
- (十) ひたむきな信愛により、このような私を真に知り、見て、私に入ることができる(11-54)
- (十一) 私に意を注ぎ、私に常に専信して念想する、最高の信仰を抱いた人々は「最高に専心した者」として、私は考える(12-2)
- (十二) この正しい甘露(不死)の教えを念想し、信仰し、私に専念する信者たち、彼らは私にとってこよなく愛しい(12-20)

## 結 び

ガンディーが生まれてから成長し、弁護士となって南アフリカに行くまで熱心なヒンドゥー教のヴィシュヌ派教徒として成長したのはその宗教に囲まれた環境にある。ガンディーは両親のところで『マハーバーラタ』、『ラーマーヤナ』の二大叙事詩を子守歌のように聞いて血として、肉としてなれ親しんでヒンドゥー教を体験し、目覚めていくのである。こうした宗教的体験は高等学校、さらにイギリス留学でガンディーの精神を支え、キリスト教、イスラーム教、ジャイナ教、及び仏教徒との論争と宗教学習を通してますますヒンドゥー教への信愛を深めることとなる<sup>(124)</sup>。

が、南アフリカでのボーア政府によるインド人社会に対する人種差別政策と白人優位主義はボーア戦争後イギリスの支配になっても継承されることとなる。とりわけ、1906年のアジア人に対する人頭税法と3ポンドの人頭税の課税問題、さらに、1913年の南アフリカ連邦最高裁判所でのキリスト教の儀式以外の結婚を無効とする判決(このためインド人の妻を「内妻」の汚名を着せることとなる)による人種差別政策に対して、ガンディーは妻カストゥルバーイと共に反対運動を行い、サティヤグラハ運動として発達させ、終に1914年にスマッツ将軍との会談でインド式結婚の合法性と<sup>フ</sup>年期労働者3ポンドの人頭税廃止を承諾させるのに成功した<sup>(125)</sup>。

こうした南アフリカでのサティヤグラハ運動を踏まえて1915年に帰国するガンディーはインドのイギリス支配に対するインド独立運動をサティヤグラハ運動として捕え、インド国民を総動員するナショナリズム=民族自決運動に発達させる。と同時に、ガンディーはインドのイギリス支配に対する政治的独立と併存して経済的独立を達成するため地主制(ザーミンダリー)、機械制生産に反対して農業共同体=農村手工業を発達させる紡ぎ車、手織機の普及運動、さらに、外国産綿布の排斥運動と国産愛用運動を展開することでインド資本主義の自立と再編成に全力を注ぐのである。

南アフリカ、次いでインドでのガンディーはサティヤグラハ運動を推進し、指導する際、『バガヴァッド・ギーター』を聖典として解脱の4つの道(一ヨーガ)を一つの道(真理・非暴力)に集大成し、インド独立運動を聖化(宗教改革)しようとするが、『ギーター』の核心を無私なる行為<sup>アナークティ</sup> anasakti であると次のように答える<sup>(126)</sup>。

「問 『ギーター』の教えの核心は無私の行為でしょうか、それとも非暴力でしょうか？」

答 「わたしは、それは無私なる行為(anasakti)であると確信しています。実際わたしは、わたしの拙い『ギーター』の翻訳を『無私なる行為の福音(anasaktiyoga)』と名づけました。また、無私なる行為は、アヒンサーにまさるものです。無私であろうとする人は、無私の状態に到らんがために、必然的に非暴力を実践しなければなりません。それゆえに、アヒンサーは必要な準備段階であり、それは無私<sup>アナークティ</sup>の行為に含まれるべきものであって、それを越えたも

のではありません」

ガンディーは『バガヴァッド・ギーター』を『無私なる行為の福音』と見做し、サティヤグラハの理論知と実践知、つまり真理と非暴力の根本原理を「無私<sup>サンキヤ</sup>の行為」に求める。この「無私<sup>ヨーギン</sup>の行為」は『バガヴァッド・ギーター』の解脱の4つの道(一)行為のヨーガ、(二)放擲=捨離のヨーガ、(三)知識のヨーガ、(四)信愛のヨーガ)に共通する根本原理であり、ヒンドゥー教の有機体的宗教原理(福音)を特徴づける。それゆえ、『バガヴァッド・ギーター』を聖典にしてサティヤグラハ運動に取り組むガンディーは南アフリカ、さらにインドでの試行錯誤の中で無私の行為を実践するために自己浄化として断食を徹底的に行い、『バガヴァッド・ギーター』(神の声)を心に響かせることで救いを人格神(ヴィシュヌークリシュナ神)に求め、神とのやり取りの中で決断するのである<sup>(127)</sup>。

が、『バガヴァッド・ギーター』がヒンドゥー教の聖典として発達する際、その宗教的福音は太初での成立を見る四種姓の社会と四住期の生活慣習を解脱の4つの道で聖化して繁栄することを狙いとする有機体的宗教として体系化される。ここにインド社会はヒンドゥー教の『ギーター』を聖典として導かれる「カースト的社会」を基層にして形成され、四種姓の社会と四住期を守ることを理想とするのである。まさに、インドから帰って来たガンディーにとってインドはイギリスの植民地支配と分断統治政策とで四種姓の社会と四住期の生活慣習を危機に陥れるのである。イギリスのインド支配はインドの富をイギリス本国へ流出させ、インドの「カースト的社会」を資本主義の収奪機構へ化すことで暗黒の世界へインドを転換させるのであった。こうしたインドのイギリス支配の下で苦しむインドを救う道はヒンドゥー教の福音の下にインド独立を政治的かつ経済的に達成し、苦しむインド民族の精神的解放を伴うサティヤグラハ運動を導入することとなるのであるが、その意味でガンディーの帰国はインド資本主義をサティヤグラハ運動の下に再編し、自立化する歩みへの幕を切って落とすこととなるのである<sup>(128)</sup>。しかし、ガンディーのインド独立へのサティヤグラハ運動は対内的に不可触民制の解放を巡ってアンベードカルと論争を行ない、民族自決運動のコミュニティ問題でM.A. ジンナーとの論争を深め、他方、対外的にはイギリスのインド支配への独立運動で国民会議派の分裂、とりわけ、左派のチャンドラ・ボースと対立を深める。かくて、ガンディーはイギリスのインド支配から政治的かつ経済的に自立する民族自決運動をサティヤグラハとして取り組み、インド資本主義の自立と再編成の推進力となり、1947年のインド独立の担い手となるのである。こうしたインドの資本主義の自立的発展と「カースト的社会」の両立を併存的に達成しようとするガンディーは『バガヴァッド・ギーター』の神の声を「無私なる行為の福音」として集大成し、導きの糸にしてインド民族を独立へ導くのである。サティヤグラハは『バガヴァッド・ギーター』の神の声であり、ガンディーの生涯を支える真理そのものとなるが、ガンディーをマハトマ(聖仙グルー)に導く実践知となるのである。

## 注

- (1) マックス・ヴェーバー著 深沢宏訳『ヒンドゥー教と仏教』(東洋経済新報社), 457頁, 池田昭訳『アジア宗教の救済理論』(勁草書房), 110頁。
- (2) 川勝平太編『アジア太平洋経済圏史』(藤原書店), 16頁。川勝平太『経済史入門』(日経文庫)第4章を参照せよ。
- (3) 杉原薫『アジア間貿易の形成と構造』(ミネルヴァ書房), 37頁。
- (4) 杉山伸也, イアン・ブラウン編著『戦間期東南アジアの経済摩擦』(同文館), 5頁。
- (5) 脇村孝平『飢饉・疫病・植民地統治』(名古屋大学出版会), 11頁。
- (6) 長崎暢子編『現代南アジア①』(東京大学出版会), 6頁。辛島昇『南アジア』(朝日新聞社), 18頁。今田秀作『パクス・ブリタニカと植民地インド』(京都大学出版会), 432-433頁。アマルティア・セン『貧困と飢饉』(岩波書店), 10頁。小谷汪之『不可触民とカースト制度の歴史』(明石書店), 263頁。
- (7) 上村勝彦『バガヴァッド・ギーター』(岩波書店), 解説261頁。
- (8) ジャワーハルラル・ネール『父が子に語る世界歴史6』(みすず書房), 216頁。
- (9) 長崎暢子『インド独立 逆光の中のチャンドラ・ボース』(朝日新聞社), 234頁。
- (10) M.K. ガンディー著 田中敏雄訳『ガンディー自叙伝1』(平凡社), 20頁。本章でのガンディーの引用箇所は全てこの翻訳書からの引用である。
- (11) M.K. ガンディー, 前掲書1, 21頁。
- (12) ヒンドゥー教の不二一元論について山下博司『ヒンドゥー教とインド社会』(山川出版社), 37頁。前田専学『「ブラフマ・スートラ」および不二一元論派』(『岩波講座・東洋思想第六巻』所収), 70頁。
- (13) 蠟山芳郎訳『ガンジー自伝』(中央公論新社), 430頁。
- (14) M.K. ガンディー著 森本達雄, 古瀬恒介, 森本素世子訳『不可触民解放の悲願』(明石書店), 286頁。
- (15) M.K. ガンディー, 前掲書I, 293頁。
- (16) M.K. ガンディー, 前掲書1, 57頁。
- (17) M.K. ガンディー, 前掲書I, 288頁。
- (18) M.K. ガンディー, 前掲書1, 56頁。
- (19) M.K. ガンディー, 前掲書1, 56頁。蠟山芳郎訳, 前掲書, 429頁。
- (20) M.K. ガンディー, 前掲書I, 294頁。
- (21) マハトマ・ガンディー 森本達雄訳『わたしの非暴力1』(みすず書房), 244頁。
- (22) M.K. ガンディー, 前掲書1, 82頁。
- (23) M.K. ガンディー, 前掲書I, 295頁。
- (24) 上村勝彦訳『バガヴァッド・ギーター』(岩波書店), 41頁。『バガヴァッド・ギーター』の引用箇所は以後この上村勝彦訳からの引用である。
- (25) M.K. ガンディー, 前掲書1, 133頁。
- (26) M.K. ガンディー, 前掲書1, 133-134頁。蠟山芳郎訳, 前掲書, 128頁。
- (27) M.K. ガンディー, 前掲書I, 298頁。
- (28) マハトマ・ガンディー, 前掲書1, 246頁。
- (29) 南アフリカへのインド人の移民については, J. ネールはインドの貧困が生んだとして次のように述べる。「二百万人を超えるインド人労働者は, 海外に移住した。かれらの多くはセイロンやマラヤのプランテーションに就業した。モーリシャス, トリニダード, フイジヤ, また南アフリカ, イギリス領ギアナに移住した者も多かった」と。J. ネール, 前掲書6, 32頁。
- (30) 蠟山芳郎訳, 前掲書, 130頁。
- (31) M.K. ガンディー, 前掲書1, 249頁。

- (32) J. ネールは南アフリカでのインド人年期契約労働者の状態を農奴と次のように述べている。「かれらの多くは「年期契約労働者」として行ったのだが、じっさいは、農奴と変わらなかった。「年期証書」とは、これらの労働者との契約を含む文書だったが、これによって、かれらは雇傭主の奴隷にされてしまった」
- (33) M.K. ガーンディー, 前掲書1, 247頁。
- (34) M.K. ガーンディー, 前掲書I, 303頁。蠟山芳郎訳, 前掲書, 190頁。
- (35) M.K. ガーンディー, 前掲書2, 51頁。
- (36) M.K. ガーンディー, 前掲書2, 51-52頁。蠟山芳郎訳, 前掲書, 190-191頁。
- (37) マハトマ・ガンディー, 前掲書2, 140-141頁。
- (38) M.K. ガーンディー, 前掲書2, 33頁。
- (39) ガンディーは信託理論で地主, 資本家の富を大衆からの委託したものと見做す。「藩主や地主や資本家は貧乏人の富の受託者になる」と述べる。マハトマ・ガンディー, 前掲書2, 255頁。
- (40) M.K. ガーンディー, 前掲書2, 34頁。
- (41) 長崎暢子『インド大反乱一八五七年』(中央公論社), 226-227頁。
- (42) 上村勝彦訳, 前掲書より作成。上村勝彦『バガヴァッド・ギーターの世界』(日本放送出版協会), 72頁。
- (43) 上村勝彦訳, 前掲書, 38頁。前田専学『インド哲学へのいざない』(日本放送出版協会), 270頁。
- (44) 前田専学, 前掲書, 162頁。前田専学はガンディーの宗教哲学を不二一元論と見做し, さらにウパニシャッド哲学の「真理が神である」に根元を見出す。
- (45) 辻直四郎『ウパニシャッド』(講談社), 151頁。
- (46) 服部正明「インド思想史」(『岩波講座・東洋思想第五巻』), 40頁。
- (47) 上村勝彦訳, 前掲書, 129頁。ガンディーはこの「サット」(実在)を真理サツティヤと捕え, 神の實在論を展開する。
- (48) 前田専学, 前掲書, 162頁。ガンディーはこの「サット」(真理・有)を実在の神と見做し, 実在神(有)を心で認識する知, 歓喜の三位一体(ブラフマン)と捕え, 不二一元論を体系化する。
- (49) 上村勝彦訳, 68頁。
- (50) 正信公章「ヴェーダーンタの諸流派」(『岩波講座・東洋思想第六巻』), 69頁。
- (51) 服部正明, 前掲書, 49頁。
- (52) 上村勝彦訳, 前掲書より作成。上村勝彦『バガヴァッド・ギーターの世界』, 326頁。
- (53) 前田専学「アートマン論総論」(『岩波講座・東洋思想第六巻』), 244頁。アートマン論は不二一元論(シャンカラ)と不二不異説(ラーマヌジャ, マドゥヴァ, ニムバルカ)と2つに分れる。
- (54) 上村勝彦訳, 前掲書, 30頁。
- (55) 山下博司「インドにおける伝統思想と現代」(『現代南アジア①』所収), 181頁。
- (56) 上村勝彦訳, 前掲書, 48頁。
- (57) 茂木秀淳「初期ヴァイシェーシカ学派のアートマン観」(『岩波講座・東洋思想第六巻』), 276頁。
- (58) 上村勝彦訳, 前掲書, 124-125頁。
- (59) 井狩彌介「輪廻と業」(『岩波講座・東洋思想第六巻』), 322頁。
- (60) 上村勝彦訳, 前掲書, 110頁。
- (61) 渡瀬信之「法典の成立とその思想」(『岩波講座・東洋思想第五巻』), 218頁。宇宙秩序と人間秩序とは人間のプラクリティ(本性)を通して結ばれ, 生得天職とダルマ概念をカースト的社会のヴァルナ制度の中心と見做す。
- (62) 上村勝彦訳, 前掲書, 109頁。
- (63) 宮元啓一「時間・空間・因果性」(『岩波講座・東洋思想第七巻』), 141頁。人間のプラクリティ(本性)は実在神と化現説(因中有果論)の不二一元論のキー・ワードとなる。これは古典サーンキヤ学派のイーシュヴァラクリシュナの編纂する「サーンキヤ・カーリカ」の中で唱えられる。

- (64) 上村勝彦訳, 前掲書, 109 頁。
- (65) 宮元啓一, 前掲書, 143 頁。不二一元論は因中有果論と因中無果論の対立と論争の中から生み出される。前者はサーンキヤ学派で, 後者の学派はヴァイシェーシカとニヤーヤ学派, ミーマンサー学派である。
- (66) 徳永宗雄「ヴィシシュヌ教諸派」(『岩波講座・東洋思想第六巻』), 123 頁。
- (67) 池田昭訳, 前掲書, xviii~xix。
- (68) 深沢宏訳, 前掲書, 258 頁。
- (69) 上村勝彦訳, 前掲書, 50 頁。
- (70) 船津和幸「サーンキヤ学派とヨーガ学派のアートマン論」(『岩波講座・東洋思想第六巻』), 254 頁。
- (71) 上村勝彦訳, 前掲書, 63 頁。
- (72) 今西順吉「サーンキヤ(哲学)とヨーガ(実修)」(『岩波講座・東洋思想第五巻』), 234 頁。
- (73) 柳沢悠「村と町のつながり」(臼田雅之/押川文子/小谷汪之編『もっと知りたいインドII』(弘文堂)), 116 頁。カーストのヒンドゥー教的側面は現代インドの職業ヴァルナを決定している。
- (74) 上村勝彦訳, 前掲書, 76 頁。
- (75) 原實「ヨーガと苦行」(『岩波講座・東洋思想第七巻』), 158 頁。
- (76) 上村勝彦訳『マハーバーラタ』I(筑摩書房), 325 頁。以下引用する箇所はこの訳本から引用する。
- (77) 四種姓の社会は生得=天職の法ダルマの成就で繁栄する。渡瀬信之, 前掲書, 215 頁。
- (78) 上村勝彦訳『マハーバーラタ』I, 320 頁。
- (79) 前田専学「インドにおける伝統思想と現代」(『現代南アジア①』), 166 頁。渡瀬信之, 前掲書, 211 頁。
- (80) 上村勝彦訳『マハーバーラタ』I, 262-263 頁。
- (81) 山崎利男「ヒンドゥー法におけるカースト慣習」(『カースト制度と被差別民第二巻』(明石書店)), 53 頁。
- (82) 上村勝彦訳『マハーバーラタ』I, 275-276 頁。
- (83) 辻直四郎『ヴェーダ学論集』(岩波書店), 293-296 頁。
- (84) 上村勝彦訳『マハーバーラタ』I, 37 頁より作成。
- (85) 上村勝彦訳『マハーバーラタ』I, 250 頁。
- (86) 上村勝彦訳『マハーバーラタ』I, 241 頁。
- (87) 井狩彌介「ヴェーダ祭式の思考と世界観」(『岩波講座・東洋思想第七巻』), 34 頁。
- (88) 上村勝彦『マハーバーラタ』I, 215 頁。
- (89) 上村勝彦『カウティリヤ実利論』におけるダルマ・アルタ・カーマ」(『岩波講座・東洋思想第七巻』), 262 頁。
- (90) 上村勝彦『マハーバーラタ』I, 30 頁。
- (91) 辻直四郎, 前掲書, 284 頁。
- (92) 上村勝彦訳『バガヴァッド・ギーター』, 34 頁。
- (93) 前田専学『インド哲学へのいざない』, 164 頁。
- (94) 辛島昇『南アジア』, 44 頁。
- (95) 上村勝彦訳, 前掲書, 52 頁。
- (96) 小谷汪之『不可触民とカースト制度の歴史』, 14-15 頁。
- (97) 上村勝彦訳, 前掲書, 36-37 頁。
- (98) 原實「トリヴァルガ」(『岩波講座・東洋思想第七巻』), 245 頁。
- (99) 上村勝彦訳, 前掲書, 51 頁。
- (100) 渡瀬信之, 前掲書, 211 頁。
- (101) 上村勝彦訳, 前掲書, 139 頁。
- (102) 正信公章「ヴェーダの諸流派」(『岩波講座・東洋思想第六巻』), 89 頁。前田専学「ブラフマ・

- ストラ」および不二一元論」, 56-57 頁。
- (103) 山崎元一「社会の構造—カースト社会に住む人びと」(辛島昇編『インド世界の歴史像』(山川出版社)), 67 頁。
- (104) 上村勝彦訳, 前掲書, 257 頁。265 頁。上村勝彦『バガヴァッド・ギーターの世界』, 316-317 頁。
- (105) 上村勝彦訳, 前掲書, 55 頁。
- (106) ミルチア・エリアーデ『世界宗教史 4』(柴田史子訳)(筑摩書房), 57 頁。
- (107) 上村勝彦訳, 前掲書, 57 頁。
- (108) マックス・ウェーバー, 前掲書, 234 頁 (196)。
- (109) 上村勝彦訳, 前掲書, 131 頁。
- (110) ミルチア・エリアーデ, 前掲書, 58 頁。
- (111) 徳永宗雄「宗教的心性—ヒンドゥー教とは何か」(辛島昇編『インド世界の歴史像』(山川出版社)), 46 頁。
- (112) 上村勝彦訳, 前掲書, 138 頁。
- (113) 徳永宗雄, 前掲書, 54 頁。井狩弥介・渡瀬信之訳『ヤージュニャヴァルキヤ法典』(平凡社), 29 頁。
- (114) 上村勝彦訳, 前掲書, 138 頁。
- (115) 徳永宗雄, 「バクティ」(『岩波口座・東洋思想第七巻』), 185 頁。
- (116) 上村勝彦訳, 前掲書, 138 頁。
- (117) ミルチア・エリアーデ, 前掲書, 59 頁。
- (118) 上村勝彦訳, 前掲書, 84 頁。
- (119) 高島淳「タントリズムにおける言葉の呪力」(『岩波口座・東洋思想第七巻』), 114 頁。
- (120) 上村勝彦訳, 前掲書, 89 頁。
- (121) ミルチア・エリアーデ, 前掲書, 52 頁。
- (122) 上村勝彦訳, 前掲書, 101 頁。
- (123) ミルチア・エリアーデ, 前掲書, 53 頁。
- (124) マハトマ・ガンディー, 前掲書 I, 148 頁。
- (125) 長崎暢子「イギリス統治のもたらしたもの」(辛島昇編『インド世界の歴史像』), 340-341 頁。
- (126) マハトマ・ガンディー, 前掲書 I, 227 頁。
- (127) M.K. ガンディー, 前掲書 I, 304 頁。
- (128) 小谷汪之, 前掲書, 263 頁。